

阪大 —地域に生き世界に伸びる— NOW



OSAKA UNIVERSITY

2009
06

No.111

トピックス

第4回ホームカミングデイ開催 総合図書館で改修披露式典実施

クローズアップ

大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科

2009 6月号 No. 111

目次

トピックス	2
クローズアップ	4
役員室だより	8
ナウスPECIAL	18
キャンパスニュース	20
記念講義	30
表彰等	37
人事	42
訃報	44
インフォメーション	46
ガイドマップ	51
海外拠点だより	52
交流協定大学	54
クラブ&サークル	55
トピックス	56



表紙写真：塾生大部屋の柱（適塾）

適塾には、常時百人をこえる塾生がいて、適塾へ通ってくる外塾生と適塾内で起居する内塾生がいました。内塾生は塾生大部屋を中心に、一人当たり畳一畳分だけの広さが割り当てられ、その中に机や夜具を置いて生活していました。塾生は月に六度の蘭書の会読にむかって猛烈な勉強をしていましたが、若者らしく大いにはめをはずした行動をすることもあり、この部屋の中央の柱には刀傷が残されています。

表紙デザイン：株式会社ココティエ

第4回ホームカミングデー



総合図書館で改修披露式典



テープカット



小泉理事・副学長



高杉理事・副学長

開催

5月2日(土) いちよう祭の開催に合わせ、豊中キャンパス 共通教育本館(イ号館)イ講堂及び4月からリニューアルした 附属図書館下生協食堂において、第4回ホームカミングデイを開催いたしました。

当日は天候にも恵まれ、卒業生とご家族やご友人など多くの方々がキャンパスを訪れました。本年は同窓会連合会の入会者が増加したことに加え、社会でご活躍中の皆様には是非母校を思い出していただくことを目的に、昭和56年3月に学部を卒業された方々を特別に招待し、これまでで最多の約300名の参加がありました。

イ講堂では武田佐知子理事・副学長の司会により、大阪大学混声合唱団による「大阪大学学生歌」「万葉歌碑のうた」の合唱の後、鷲田清一総長の主催者挨拶、熊谷信昭同窓会連合会会長(元総長)の挨拶の後、卒業生を代表して、今年1～3月に放映されましたNHK土曜時代劇「浪花の華 - 緒方洪庵事件帳」の原作者でもある文学部卒業の作家築山 桂(つきやま けい)さんによる講演が行われ、母校の思い出などをお話いただきました。

詳細は、キャンパスニュース(27ページ)をご覧ください。
(企画部広報・社会学連携事務局)



混声合唱団



築山 桂さん



熊谷会長

実施

附属図書館・総合図書館(旧・本館)では、このほど耐震改修工事が完了したことを受け、改修披露式典を6月2日(火)におこないました。

小泉潤二理事・副学長(附属図書館長)の式辞、高杉英一理事・副学長の挨拶に続き、竹中 浩副館長(総合図書館担当)を加えた3名によるテープカットがおこなわれ、その後、新装となった総合図書館の見学会がおこなわれました。

耐震改修工事のおこなわれた総合図書館B棟は、各階毎にゾーニングがおこなわれ、それぞれ「ラーニング・コモンズ」「端末ゾーン及びマルチメディアゾーン」「サイレントゾーン」として整備されました。

「ラーニング・コモンズ」は、自主的・自立的な学習活動を支援するための「学びの場」「創造の場」「発想の場」であり、情報機器や可動式の机・椅子を設置することにより、グループでの学習や議論をサポートすることのできる「話せる図書館」スペースとなっています。このラーニング・コモンズには、ティーチング・アシスタントを配置し、図書館の利用や学習をサポートします。また、新たに館内利用のための貸出用ノートPCを24台用意しています。



「端末ゾーン及びマルチメディアゾーン」には情報教育システム用パソコンとマルチメディア・パソコンを計66台、ゼミも可能なグループ学習室を2部屋設置しています。

「サイレントゾーン」は、静かな環境を維持し、学習に専念するためのスペースとし、個人ブース10席を含め計150席の閲覧席を設置しています。

このほかにも安全・安心のための防犯カメラ、車椅子用階段昇降装置、対面朗読室、携帯電話ブースなど、施設・設備ともに改修前に比べ格段に充実させました。附属図書館では、このように充実した施設・設備が学習・研究のために十二分に活用されることを期待しています。

(附属図書館)

大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科

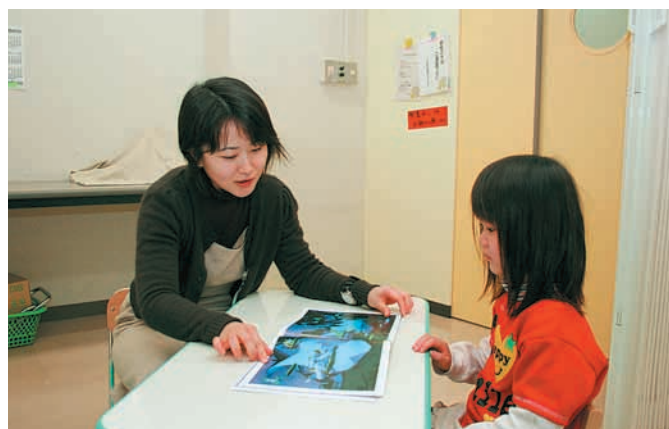
(United Graduate School of Child Development, Osaka University,
Kanazawa University and Hamamatsu University School of Medicine)

大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科長 遠山 正 彌

本研究科設置の背景： 子どものこころを健やかに育てる

少子化時代を迎えたわが国の社会が直面する最大の課題は「子どものこころを健やかに育てる」ことです。しかしながら、子どものこころはきわめて深刻な危機にさらされています。こころの破綻が引き起こす青少年の犯罪、「いじめ」を苦しめた自殺、広汎性発達障害や注意欠陥・多動性障害等の発達障害を持つ子どもの増加、また、うつ病や摂食障害の低年齢化が進み、さらに、小学生が統合失調症を発症するケースもみられるようになってきています。

このような状況の中、金沢大学では平成16年度より21世紀COEプログラム「発達・学習・記憶と障害の革新的脳科学の創成」において、大阪大学と浜松医科大学では平成18年度より連携融合事業「子どものこころの発達研究センター」において、臨床医学に加え画像・疫学や生命科学を加えた医科学に、社会心理学・教育支援学をも統合した学際的な新領域を創成し、従来は主として社会心理学の研究対象であった子どものこころの問題を医科学的見地から理解するための基盤を整備してきました。3大学の研究によって子どものこころの問題はようやく医学的パラメータを持って語れる時代を迎えたと言っても過言ではありません。



一方で、子どものこころを扱う専門家は絶対的に数が不足しており、さらに、その多くは心理学、保健学／看護学、教育学などを修めた者であり、それぞれの専門領域と経験とに基づいて子どものこころを扱っているため、定式化されたものではなく、医学的知識も決定的に不足しているのが現状です。これらの問題を克服するためには、これらの専門家に対して、脳科学と社会心理学、教育学の統合的観点に立ち、系統だった教育研究を行うのが最も現実的ですが、このような教育研究を進めようとするとき、子どものこころの問題の複雑性とそれを扱う専門家の専門分野の多様性は、既存の単独の教育機関において十分な成果を挙げることを困難にしています。



したがって、私たちは異なる出身履歴を持つ社会経験のある専門家が共に学び研究する連合大学院『大阪大学・金沢大学・浜松医科大学 連合小児発達学研究科』を設置しました。

既存の領域を超えた新しい研究領域である『子どものこころと脳発達学』の研究者の育成と、協働して進めていく密接なネットワークを形成し、真に学際的で現在の社会の要求に応えうる指導者層や高度専門家の育成を目指しています。

本研究科の組織： 伝統と成果を誇る 3 つの拠点



大阪大学



金沢大学



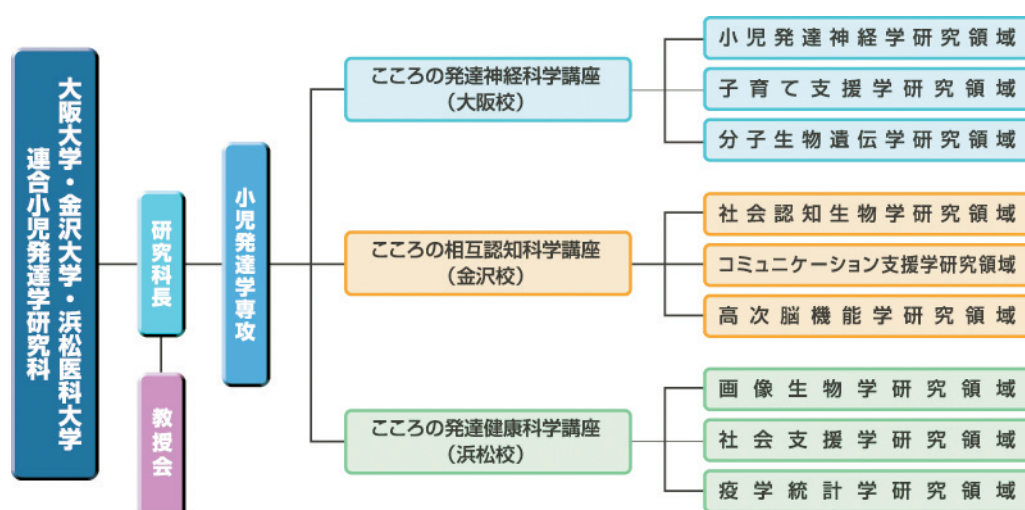
浜松医科大学

長年の先端的な脳研究の成果を誇る大阪大学、臨床の場でのコミュニケーション教育学に伝統を持つ金沢大学、世界最先端レベルの精神臨床研究の行われている浜松医科大学。近畿、北陸、東海の主要都市に拠点を構えるこの3大学の密接な連携・協力のもとに、本研究科は設置されています。

子どものこころの背後にある問題の本質を探るため、分子生物学、脳画像、電気生理学を駆使した脳科学的研究と、大規模疫学調査を基礎とした社会心理学的研究を融合した教育研究体制を取り、それぞれの大学の長所を生かして、1研究科1専攻のもと構成大学毎に1講座3研究領域を設けています。

分子生物学領域を「分子生物遺伝学研究領域（大阪大学）」

と「社会認知生物学研究領域（金沢大学）」が、脳画像領域を「高次脳機能学研究領域（金沢大学）」と「画像生物学研究領域（浜松医科大学）」が、電気生理学領域を「小児発達神経学研究領域（大阪大学）」が、大規模疫学調査領域を「疫学統計学研究領域（浜松医科大学）」がそれぞれ担当し、さらに子どものこころのケアを実践するためのネットワーク構築を教育研究するために、「子育て支援学研究領域（大阪大学）」、「コミュニケーション支援学研究領域（金沢大学）」、「社会支援学研究領域（浜松医科大学）」の3研究領域を設け、広域にわたるダイナミックな展開を志向しています。



さらなる飛躍を目指して - 博士後期課程 3 年のみの大学院 -

現在、各界で活躍している臨床心理士やカウンセラーは、学部卒や修士修了レベルの者が多く、これらの人材を指導する立場としては、文理融合の立場から問題解決能力を持っていること、また、実際の臨床や教育の現場から研究テーマを見いだせる人材が必要です。そのため、本研究科は、子どものこころの諸問題に携わる様々な専門職の人たちを連携・統合できる高度な指導者と、医学医療、心理学、教育学の基盤に立って、子どものこころと脳発達とその障害に関わる研究者の養成を目指しています。

このような高度指導者層の育成は、アメリカ・ヨーロッパでは既に行われており、これらの指導者層が行った高度な臨床疫学的研究はすぐに国策に反映され、非常に高い評価を受けています。実際に世界の一流医学系雑誌には、Ph.D. を有する心理学者、あるいは教育学者によって、ハイレベルな臨床研究が数多く報告されています。Ph.D. の有資格者は社会的には MD と同等とみなされ、臨床現場でも例えば、Ph.D. を有

する心理学者は、若手の心理士の指導、医師への助言、また、治療的パートナーとして、臨床上重要な一員として認識されています。日本及びアジア諸国の社会の現代化に伴い、子どものこころの障害の社会問題化・顕在化に対応する社会的対応基盤の整備に、学際的及び文理融合型の教育を受けた博士課程取得者の役割が、ますます高くなっています。

このことから進学を希望する学生には、心理学、教育学、保健学・看護学、社会福祉学等の分野において、修士課程レベルの専門的な教育を受けた者や、子どものこころの諸問題に関わる医師、学校教師、スクールカウンセラー、看護師、言語聴覚士、臨床心理士等の職業経験がある者が望ましいため、文理融合プラットフォームによる高度な総合教育を行う博士後期課程 3 年のみの大学院としています。それぞれの専門領域を持ち、活かしつつ、それを超えての更なる飛躍、活躍が期待されます。

特色ある充実したカリキュラム

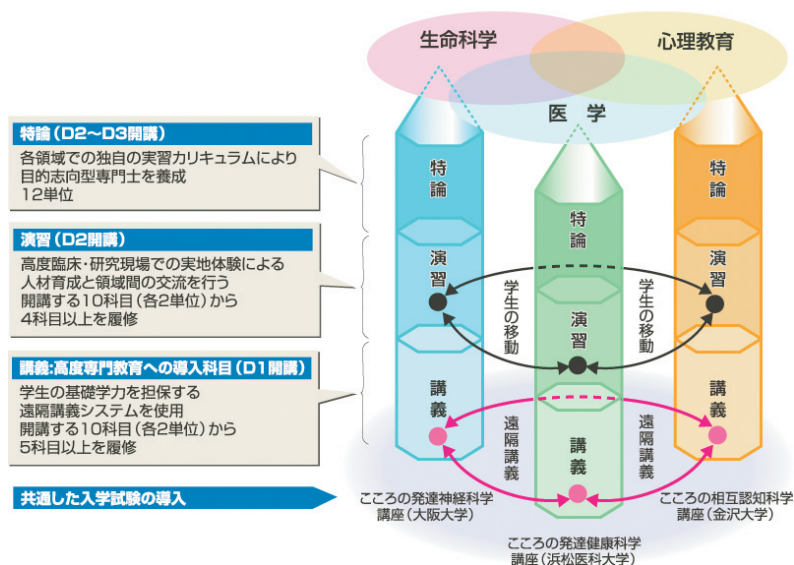
授業は、導入科目（講義形式）演習科目（支援や研究の現場において実践的学習を行う）特論科目（論文作成を目指す高度専門科目）からなります。

導入科目は、D1 に配当され、異なるバックグラウンドを持つ学生に対して、D2-D3 に行う演習や特論における基礎学力を担保するために講義形式にて実施し、生命科学系、医療系、社会・心理系の 3 分野 10 科目からなり、5 科目 10 単位以上を修得します。また、研究の基礎として「生命倫理学」を必修

履修科目とし、現代の医療技術の進歩に伴って生じる生命に関わる諸問題を知り、子どもの人権をいかにして守るかを学びます。

学生は、指導教員が所属する 3 大学のいずれかに配属され、他大学で開講される導入科目は遠隔会議システムにて聴講します。遠隔講義システムは画像・音声ともに対面講義と変わらない質を確保しており、配属大学の違いによる地理的な問題を補い、全学生に質の高い授業の提供を可能にしています。

小児発達学博士の育成



D2 配当の演習科目は、1日の集中講義と3日の実習からなり、実際に開講される大学に赴き受講します。実習では高度臨床・研究の実践の場やカンファレンスにも参加することを予定しています。合計4科目8単位の演習の修得を課しています。

なお、本研究科において多数を占める社会人学生のために、導入科目においては5、6時限に開講する他、サイバーメディ

アセンターの協力を得て、講義収録配信システム（echo360）を導入し、自宅等において導入科目の全授業の補習・復習ができる環境を整えており、また、来年度開講する演習科目は、通常期その他、夏季休暇中にも開講予定とするなど、社会人学生が履修しやすいように配慮しています。



（写真A）

遠隔講義システムを使用した講義風景（写真A）とecho360によりプレゼン資料とともに収録配信された講義の映像（写真B）



（写真B）

社会貢献： 多様化する社会ニーズへの対応

本研究科が前述の人材を育成していくためには、社会の理解と多様化する社会ニーズへの対応を協働して進めていく密接なネットワークの形成が不可欠であると考えています。そのためにまず、本研究科の存在を広く認知してもらうための活動を行っていきます。最近の活動としては、4月29日（水・祝）に連合小児発達学研究所と大阪知的障害者雇用促進建物サ-

ビス事業協同組合（エル・チャレンジ）財団法人大阪府地域福祉推進財団、大都美装との共催で、堺市のビッグ・アイ（国際障害者交流センター）多目的ホールにて「障がいとともに考えるセミナー」と題し、本研究科の教員を初めとして4人の講師により、～医学と教育の連携、教育の現場、そして就労へ～をテーマに発達障害に対する理解を深め、啓蒙するセミナーを開催いたしました。障害を持つ子供達の養育者、現場の指導者である教員や支援者、一般、行政の方々等総勢約800名近くの参加があり、それぞれの抱えている問題点を明らかにし、お互いの理解を深め、今後の対応について議論する機会を提供しました。講演では熱心にメモを取ったり、休憩時間や終演後、講師の方々に積極的に質問を行うなど、大変熱のこもった会となり、本セミナーの目的が達成されたことが示されました。

今後ともこのような活動を通して、本研究科の成果を広く社会に発信し「子どものころを健やかに育む」ことに貢献します。



とおやま・まさや

昭和47年3月大阪大学医学部卒業、昭和47年5月大阪大学医学部附属高次神経研究施設助手採用、助教授を経て昭和61年4月医学部教授。平成17年4月から20年3月まで大学院医学系研究科長・医学部長、18年4月から大学院医学系研究科附属子どものこころの分子統御機構研究センター長、21年4月より大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究所長。

プロフィール

役員室だより

2009.6 Vol.30

各室の検討状況

総合計画室

学内措置による教育研究組織の整備

新たな予算措置を伴わない学内措置による教育研究組織の整備として、4月の役員会で次の事項が承認されました。

- ・臨床医工学融合研究教育センターの改組及び設置期間の延長（平成21年5月1日）
平成27年3月31日まで

教育研究組織の時限の取扱い

教育研究組織の時限の取扱いについて、5月の教育研究評議会で申し合わせ事項として次のとおり決定されました。

申し合わせ事項（平成21年5月20日教育研究評議会決定）

教育研究組織の時限の取扱いについて

国立大学の教育研究組織の時限については、法人化前は文部科学省がその組織の特性や必要性等を勘案し概算要求を経て法令において設定する形式となっていたが、法人化後は、時限の設定の有無は各大学の判断に任せられ、時限を撤廃した大学も多い。

大阪大学においては、法人化後、時限の取扱いについては必ずしもはっきりとした方針を決めずに個別に対応してきたが、今後は以下の基本的な考え方により取り扱うこととする。

1. 学内共同教育研究施設等

- (1) 今後新設する組織の時限については、次の考え方に基づき、個別に対応する。

特別教育研究経費の期限など、その組織にとって大きな見直しが必要と予想される場合には、そこに時限を付けてその組織の役割や規模等について点検を行う。

基本的には、専任のいないバーチャルな組織については、時限をつける方向で運用する。

- (2) 法人化前に設置されていた組織のうち、時限を設定されていた組織にあっては、時限到来時に、時限を廃止する。

- (3) 法人化後設置された組織（時限を付さなかった組織を含む。）にあっては、(1)の考え方に基づき、時限の見直しが可能とする。

- (4) 時限を付けることで、その組織の人事運営上の制約とならないよう可能な限り配慮するものとする。

2. 部局附属施設

- 新設又は改組を問わず、時限を付けるか否かは部局の裁量に委ねる。

以上の手続きについては、総合計画室、教育研究評議会で審議する。

教育研究環境の改善と施設整備

■ 平成 20 年度は、施設整備費補助金により、老朽施設の耐震改修・機能改善改修を中心に整備しました。

理工学図書館



北面

構造：鉄筋コンクリート造
規模：地下 1 階地上 3 階
延べ面積：2,790 m²
着工年月：平成 20 年 8 月
完成年月：平成 21 年 3 月



ラーニング・コモンズ

理工学図書館耐震改修工事が完了しました。外観については、新棟と調和のとれた色調・素材の外壁とし、補強が必要な北面は外観をそこなわないよう室内側に鉄骨ブレス補強を行いました。施設内については、1 階に新たな機能としてラーニング・コモンズを設置しました。またエントランス周り、トイレ等バリアフリー対策を実施しました。

総合図書館



北東面

構造：鉄筋コンクリート造
規模：地下 1 階地上 3 階
地下 1 階地上 5 階
改修面積：計 4,200 m²
着工年月：平成 20 年 8 月
完成年月：平成 21 年 3 月



閲覧室

総合図書館耐震改修工事が完了しました。外観については、周辺建物との調和を図り既存のベランダを利用した格子形のダブルスキン工法としました。施設内については、室内空間を阻害しない適切な補強配置、またバリアフリー対策の実施により、増加する学生の対応と安心安全な教育研究スペースの確保、学生サービス及び地域サービスの改善・向上を図りました。

文法経本館



資料室

構造：鉄筋コンクリート造
規模：地上 4 階
改修面積：3,120 m²
着工年月：平成 20 年 8 月
完成年月：平成 21 年 3 月

文法経本館改修工事（1 期）が完了しました。平成 19 年度に行った耐震改修工事に引き続き、施設内の機能改修工事を行いました。文法経各研究科の総合的な教育・研究拠点として、大学の再編統合における新たなカリキュラムやプログラムを行える施設整備を行うとともに、資料室・書庫などに書籍を集約し、若手研究者等のスペースや共同研究スペースを確保しました。

蛋白研本館



南東面

構造：鉄骨
鉄筋コンクリート造
規模：地上 9 階塔屋 1 階
延べ面積：7,850 m²
着工年月：平成 20 年 8 月
完成年月：平成 21 年 3 月

蛋白研本館耐震改修工事が完了しました。建物の外観イメージを保つため、景観上重要な南面は既存のままとし、北面及び妻面に補強を集中させました。施設内については、バリアフリー対策、スペースの集約化・再配置を実施し、類似した部屋を共同利用スペースとして確保しました。また、LCC（ライフサイクルコスト）低減を考慮した材料を使用しました。

教育・情報室

全学休講と補講

新型インフルエンザの国内最初の感染者が神戸市、豊中市、茨木市で同時に発生したことに伴い、大阪大学の活動が感染伝播を広げることがないよう、5 月 17 日から 24 日まで全学休講などの措置が取られました。これに伴い必要となる補講日の設定は部局ごとに行うこと、第 2 学期の開始日は変更しないことが決定されました。なお、今後の状況の変化によっては、方針の見直しを行うことがありますので、引き続きホームページや KOAN に注意し、常に最新の情報を得るようにして下さい。

組織的な大学院教育改革推進プログラムの申請

大学院教育改革や学部教育改革のための、いわゆる GP の大阪大学としての申請について、5月11日に教育・情報室でヒアリングを行いました。対象となったのは、「組織的な大学院教育改革推進プログラム」6件、「教育・学生支援推進事業（テーマA）」3件です。本年は新規プログラム採択のための文部科学省予算が減額され、「国際化拠点整備事業（グローバル30）」、「組織的な大学院教育改革推進プログラム」、「大学教育・学生支援推進事業（テーマA）大学教育推進プログラム」を含めて、1大学の申請が合計3件までに制限されました。教育・情報室では「国際化拠点整備事業（グローバル30）」以外に大阪大学として申請する2件について慎重に審査を行い、以下のプログラムを選んで文部科学省に提出しました。

プログラム名称	申請部局	備考
健康環境リスクマネジメント専門家育成	薬学研究科	組織的な大学院教育改革推進プログラム
システム創成プロフェッショナルプログラム	基礎工学研究科	組織的な大学院教育改革推進プログラム

大学院高度副プログラム等の履修状況

平成21年度には、20の大学院高度副プログラムと5つの科目等履修生高度プログラムが開設されています。大学院高度副プログラムには合計569名の大学院生、科目等履修生高度プログラムには87名の科目等履修生が履修登録をしています。

この4月に設置された学際融合教育研究センター（旧学際融合教育研究プラットフォーム）の支援のもとに進められるこれらのプログラムは、部局や専門分野を横断する教育制度として、全国に先駆けて実施されています。複眼的視野の獲得のため、分野を横断する新しい専門性のため、大学院レベルの高度な教養のため、あるいは実務的な訓練のためなど、さまざまに用意されているプログラムに多くの学生が参加するよう、情報を周知し受講を勧めていただくようお願いします。

奨学金の返還免除

第一種学資金返還免除候補者選考委員会を4月21日に開催し、日本学生支援機構から学資金の貸与を受けた本学の大学院生について、返還免除候補者を選考しました。大学院生に対する経済支援として、きわめて重要な事業です。博士前期課程の対象奨学生数936に対する推薦数281と追加推薦数6、また博士後期課程の対象奨学生数319に対する推薦数96、及び、専門職大学院課程の対象奨学生45に対する推薦数14と追加推薦数1におけるそれぞれの対象選考を行い、日本学生支援機構に推薦しました。

情報セキュリティポリシーの制定

2009年3月31日付で、大阪大学の情報セキュリティポリシーが制定されました。これは、本学の情報関連活動が関係法令及び社会通念に適合するよう啓発するとともに、教育研究及びその支援活動を充実させるための情報環境の維持、並びにその適正な利用の促進を図ることを目的としており、「政府機関の情報セキュリティ対策のための統一基準」を遵守することなどを定めています。なお、情報セキュリティ対策規程については、平成21年度中に制定する予定です。

電子的情報基盤整備経費

大阪大学では、電子ジャーナルやデータベース等の学術情報を全学の共通基盤として充実するため、以前の部局負担中心の方式を改めて「電子的情報基盤整備経費」を導入し、平成20年度と平成21年度については必要経費4億4千万円のうち4分の3を全学共通経費化しています。このような改革により、急速に重要性を増す電子的情報のニーズに全学的に対応すると同時に、雑誌の重複購入を避け雑誌所蔵に必要なスペースを節減することが可能となります。電子ジャーナルにより購読可能となっている雑誌については、可能な限り同一誌の紙媒体による購入を中止し、予算とスペースの効率的利用を図るよう、全学の協力をお願いします。

附属図書館ラーニング・ commons の完成

大阪大学の附属図書館 4 館のうち 2 館の耐震改修工事が行われたのを機に、豊中キャンパスの総合図書館と吹田キャンパスの理工学図書館に「ラーニング・ commons」が新設され、それぞれ 6 月 2 日と 4 月 28 日の改修披露式典の後に利用が開始されました。

ラーニング・ commons は、教育全般における TEACHING（学生に教えること）から LEARNING（学生が主体的に学ぶこと）に向かう大きな流れに沿ったものです。その特徴は、従来の図書館のように一人で静かに読書し学習するばかりでなく、活発に議論しグループ学習を進めるためのスペースを提供するということです。とくに総合図書館のラーニング・ commons には 756m² の広さがあり、78 の座席とラウンジ 28 席を備えています。このほか 3 階にはグループ学習室 2 室があります。ラーニング・ commons は「インフォメーション・ commons」から発展したと言われるように、ここでは電子媒体の資料（電子ジャーナルやデータベースなど）と紙媒体の資料（参考資料や書籍、雑誌など）を同時に組み合わせ利用することができます。このスペースは無線 LAN などを装備し、PC を持ち込めるばかりでなく備え付けの PC を貸し出し、マルチメディアにも対応しています。ホワイトボードやプリンタを用意し、移動と組み合わせが可能で大小のグループで使うことができるテーブルとチェアを配備しています。また、これまでの図書館職員による利用支援に加えて、実験的に TA を配置し、主体的な「学び」のための共有のスペースとしました。全学のコミュニケーションのためにパナソニック社から寄贈された、103 インチプラズマディスプレイ（O+PUS「オーパス」）も置かれています。本格的なラーニング・ commons として全国に先駆けてつくられたこの新しい空間が、「学びの場」「創造の場」「発想の場」としての役割を果たすよう、学生と教員による自由な創意工夫と積極的な活用を望みます。



豊中にステューデント・ commons を設置

「commons」は、共有の場・共有の空間を意味します。豊中キャンパスの大学教育実践センター自然科学棟には、この秋に「ステューデント・ commons」を新設することになりました。上記「ラーニング・ commons」と対になるかたちです。こちらは資料を探し議論し学ぶというより、談話とコミュニケーションと交流の色彩が強い空間となります。

ここには大学教育実践センターばかりでなく、同棟 4 階に移転したコミュニケーションデザイン・センター（CSCD）3 階と 2 階のグローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）と留学生センターの一部、また学際融合教育研究センターが非常に近い位置に集結することになります。これにより、大阪大学の 3 つの教育目標「教養」「デザイン力」「国際性」を、各センターの連携と協力のもとに総合的に追及する体制を築くことができます。

ステューデント・ commons の改修は 1・2 階部分を中心に行われます。1 階には阪大カフェ「カルチエ」が開かれ、カフェゾーン、情報ゾーン、自習ゾーンなどから構成されます。映像による教育活動が可能となる開放型セミナー室は、室内部分とテラス部分とを一体化して利用することができます。2 階には新型セミナーや新しい教育活動を展開するためのセミナー室が整備されます。多くのスペースに、組み合わせや移動が柔軟に行えるテーブルやチェアが配備されます。無線 LAN が完備し、58 インチプラズマディスプレイ（O+PUS「オーパス」）も設置されます。

ステューデント・ commons は授業のほか、学習成果発表、課外活動、学生同士の談話、教員と学生の対話、留学生と日本人学生の交流、またさまざまなイベントなどに利用することができます。これに併せて自然科学棟正面の中庭部分も同時に整備されます。完成は平成 21 年 10 月末の予定です。



研究・産学連携室

平成21年度グローバルCOEプログラムの採択状況

グローバルCOEプログラムは、21世紀COEプログラムを更に発展させ、我が国の大学院の教育研究機能を一層充実・強化し、世界最高水準の研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため平成19年度から導入されたものです。

本学からの申請3件（新規提案2件及び継続提案1件）に対し2件が文部科学省におけるヒアリング実施課題となり、その対策として学内ヒアリングを実施し、各拠点リーダーに助言を行いました。今年度、本学からは下記プログラム1件が採択されました。

分野名	拠点のプログラム名称	拠点リーダー所属・職・氏名
学際、複合、新領域	認知脳理解に基づく未来工学創成	基礎工学研究科・教授・石黒 浩

平成21年度産学官連携拠点の採択状況

文部科学省と経済産業省が共同で実施する産学官連携拠点事業は、下記2種類の産学官連携拠点を選定し、それらに関係府省、自治体等の各種の施策を有機的に組み合わせて総合的・集中的に実施することにより、人材育成・基礎研究から商業化・事業化までの活動を、産学官が有機的に連携して推進し持続的・発展的にイノベーションを創出するイノベーション・エコシステムの構築を図る事業であり、今年度、本学関係として以下の拠点が採択されました。

	拠 点 名	提 案 機 関
地域中核産学官 連携拠点	大阪グリーンエネルギー インダストリー拠点	産 大阪商工会議所、堺商工会議所
		学 大阪大学、大阪府立大学、大阪市立大学
		官 大阪府、大阪市、堺市
グローバル産学官 連携拠点	関西バイオメディカル クラスター	産 (社)関西経済連合会、大阪商工会議所、大阪医薬品 協会、神戸商工会議所
		学 大阪大学、大阪府立大学、大阪市立大学、神戸大学、 兵庫県立大学
		官 大阪府、兵庫県、大阪市、神戸市

科学研究費補助金等の獲得推進方策

科学研究費補助金は、本学において学術研究を推進する上で重要な研究資金であるとの認識から、研究・産学連携室では、本室員からなる検討WGを設置し、科学研究費補助金の申請・採択に係る種々のデータ分析を行いながら、科学研究費補助金をより多く獲得するための推進方策について検討を行っています。

ワーキンググループによるプロジェクトの推進

研究・産学連携室の下に設置した生命科学・生命工学、ナノサイエンス・ナノテクノロジー、脳情報学、光科学、地球環境資源エネルギー科学の5つの研究企画ワーキンググループでは、本学の中長期的研究戦略として、1) 部局横断型研究の推進、2) 第三期科学技術基本計画への対応、3) 文部科学省、JST等を始めとする各種プロジェクト公募への対応等を視野に入れ活動を続けております。また、昨年度は、部局横断型の研究プロジェクト等支援経費により、シンポジウム開催や動向調査等合計7件に対して支援しましたが、本年度においても同様の支援を行うこととしています。

評価室

20年度業務実績報告書の作成と提出

「業務運営・財務内容等の状況」及び「教育研究等の質の向上」について、評価室を中心に、20年度業務実績報告書の作成作業を進めています。各部局、各室等から提出された実績を基にとりまとめ、6月末に文部科学省に提出します。

本報告書の取りまとめに際しては、全学での多大のご協力に対し厚く御礼申し上げます。

なお、本年度は、第一期中期目標期間の最終年度でありますので、本学の第一期中期計画が完全に達成されるよう、各部局、各室等におかれては、引き続きご協力をお願いします。

大学機関別認証評価の受審について

大学機関別認証評価とは、学校教育法上、大学の質を保証することを目的として、大学が文部科学大臣から認証を受けた評価機関による評価を7年に1度受け、その評価結果を踏まえて、教育活動等の改善に役立てるための制度として、平成16年度から開始されたものです。

本学は、認証評価機関として（独）大学評価・学位授与機構を選択し、現在、評価室が中心となって教育・情報室とも連携をとりつつ「自己評価書」を取りまとめ、6月末に同機構へ提出します。

特に、自己評価書の作成に際して、各種調査等にご協力いただいた学部・研究科にはご協力に対し御礼申し上げます。

なお、今秋から冬にかけて実施される実地訪問調査（2日間）においては、役員のみならず各学部・研究科長をはじめ、必要に応じて教職員並びに学生の方々にもご出席、ご説明いただくことが予定されていますので、その際には何卒ご協力をお願いします。

財務室

大阪大学未来基金（大学）の創設

財務基盤整備本部及び財務室では昨年から大阪大学の基金の創設を検討してきましたが、本年4月6日の臨時役員会議で大阪大学に基金を設立することが認められ、5月1日付け（大阪大学創立記念日）をもって「大阪大学未来基金（大学）」が設置されました。

この基金は、従来より後援会で募集されてきた「大阪大学未来基金」に加えて、大学として新たに設置したものでありますが、名称については、従来の「大阪大学未来基金」と別名とはせず「大阪大学未来基金（大学）」とすることとなりました。

大阪大学では、「大阪大学未来基金（大学）」の設置に伴い、5月2日のホームカミングデイにて同基金の案内をするなど募金活動を開始しました。

今後、大阪大学の財務基盤の確立に向けて、本基金の充実を図ることとしており、学内教職員や卒業生を始め、企業・市民の方々にもご理解ご協力方よろしくをお願いいたします。



大阪大学未来基金（大学）

基金の活用プラン

- 教育のために**
経済的により豊かな学生・教員に対する奨学金や私費留学生などの生活支援をします。
- 研究のために**
21世紀をリードする世界最高レベルの研究を目指して、大学にしかできない基礎的研究や最先端の研究、本学を志した後進の育成を支援します。これらの研究は、新たな応用研究へと繋がることによりその具体的な成果を広く社会に還元します。
- 地域社会との連携のために**
地域ボランティア活動への支援や公開講座・公開講演会を実施すること、良質な教育や多様な知的成果物の継続的な提供を行います。
- 世界で活躍できる人材のために**
学生海外研修の助成、海外学生交流に特化した奨学金・ボランティア活動に対する支援、海外研究者の招聘、国際シンポジウム開催等学術交流の促進支援、留学生生活の支援と支援（外国人入国支援）。
- 学習環境の充実のために**
良質な学習設備・資料の収集、保存、活用。

2009年5月1日
大阪大学未来基金（大学）

人事労務室

看護職員に係る夏季休暇取得期間の延長（試行）

医学部附属病院及び歯学部附属病院では、今年度から、看護職員（7対1看護体制部署に属する者に限る）対象に夏季休暇取得期間の延長の制度改正を行いました。

これに合わせて、7対1看護体制部署以外に勤務する看護職員を対象に同休暇取得期間延長（6月1日から10月31日までの5ヶ月間）の試行を行うこととしました。

両病院においては、看護部全体として看護業務の応援体制をとっており、また、7対1看護体制部署とそれ以外の部署で一つの看護単位を構成している例もあります。このため、すべての看護職員を対象に期間延長を行うことにより、看護運営の円滑実施や優秀な看護職員の確保に資するかどうかを検討するものです。

期間は平成21年度及び22年度とし、各年度において実施結果の報告を精査したうえで、本格実施の可否を判断する予定です。

障害者雇用のより一層の推進

「障害者の雇用の促進等に関する法律」（以下「障害者雇用促進法」という。）には、「すべて事業主は、身体障害者又は知的障害者の雇用に関し、社会連帯の理念に基づき、適当な雇用の場を与える共同の責務を有するものであって、進んで身体障害者又は知的障害者の雇入れに努めなければならない。」と規定されています。本学も、その責務を果たすため、障害者の方々の雇用に積極的に取り組んでいます。

昨年度からは、知的障害者の方々を用務補佐員として雇用し、「エコ・レンジャー」と名付けて吹田キャンパスのメインストリートを中心とした清掃業務を行っています。（詳細は、2008.8月号参照）

このたび、豊中キャンパスでも活動を開始し、新たに10名の用務補佐員、及びその業務支援を行う4名の専任スタッフを雇用しました。豊中キャンパスの「エコ・レンジャー」は、メインストリートを中心とした清掃業務と、理学研究科及び基礎工学研究科の協力を得て自転車駐輪整理業務に従事しています。

その結果、「エコ・レンジャー」として雇用している知的障害者の方々は、現在24名となりましたが、障害者雇用促進法が求める障害者雇用率（2.1%）にはまだまだ到達していません。各部局等におかれましても、新たな職域の開拓等についてご検討いただくとともに、引き続き障害者雇用に積極的に取り組んでいただきますよう、お願いします。



豊中キャンパスでも「エコ・レンジャー」は大いに力を発揮しています。引き続き、皆様の応援、よろしくお願いします！！

豊中キャンパスの連絡先

総務部障害者雇用推進支援室（豊中事務室）

豊中市待兼山町1-3 基礎工学研究科内
内線 6989

（事務室の場所は、基礎工学研究科正面
斜め向かいの2階建ての2階部分
（旧基礎工電話交換室）です。）

障害者職業生活相談員の交代

障害者を5人以上雇用している事業所は、障害者雇用促進法に基づき、障害者の職業生活全般にわたる相談・指導を行うために、資格認定講習等を受講した、障害者職業生活相談員を選任することが義務づけられています。

このたびの人事異動に伴い、総務部障害者雇用推進支援室 池本（いけもと）室長補佐が新たな障害者職業生活相談員に選任されました。

当室としましては、障害者の職業生活全般にわたる相談・指導を通して、障害者が安心して働ける環境づくりに寄与していく所存ですので、引き続きよろしくお願いします。

（具体的な相談員業務）

- 障害者の職務内容の改善や職務能力向上に関すること
- 障害者の障害に応じた環境整備に関すること
- 職場の人間関係や職場のルールの指導に関すること
- 障害者の健康の維持管理に関すること
- 職業生活面のケアに関すること
- その他、障害者の職場適応の向上に資すること

新障害者職業生活相談員から一言

こんにちは！障害者雇用推進支援室の池本です。
支援室に勤務して1年が過ぎましたが、まだまだ勉強の毎日です。
障害を持つ方々が、普段感じておられる悩みなどを一緒に解決していくことで、少しでも明るい職場作りに寄与したいと思いますので、ぜひお気軽に声をかけてくださいね！！

[現在は豊中事務室に常駐しています。内線 6989]



大阪大学における女性研究者比率

大阪大学は、平成19年度に採択されました女性研究者支援モデル育成事業「次世代に繋ぐ女性研究者サポート連鎖の形成」において、本学の理工系部局¹における常勤女性研究者の人数（平成19年4月時点）を3年以内に3割増加させることを目標に掲げております。

この度、途中経過として平成21年4月1日現在の人数を集計しましたところ、下表のとおり、予定よりも早く、当初の数値目標（148名）をクリアいたしました。皆様のご尽力に感謝いたします。

しかし、海外の有名な大学と比較すると、本学の女性研究者比率は、文系も含めた全体で11.0%とまだまだ低いという状況です。人事労務室に置かれている多様な人材活用推進委員会では、昨年度「部局アンケート調査（女性研究者の雇用状況及び今後の展望について）」、「理工系部局¹へのヒアリング調査」及び「常勤教員の実態と意識に関するアンケート」等を行い、今後に向けての課題をピックアップしております。

性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮することができる男女共同参画社会の実現は、男女共同参画社会基本法にも最重要課題として位置付けられており、国立大学協会も平成22年度までに女性教員比率20%を目指すという目標を掲げています。

本学においても、更なる女性研究者増加を目指し、今後も継続して取り組んでいきたいと思っておりますので、ご協力のほどよろしくお願いします。

理工系部局¹における女性研究者

	研究者総数 ²	女性研究者数 (平成19年を100とした場合)	女性研究者比率	女性研究者比率 (大学全体)
平成19年4月1日現在	2,039名	114名(100)	5.6%	8.7%
平成21年4月1日現在	2,184名	156名(137)	7.1%	11.0%

1 「理工系部局」：医学系研究科保健学専攻を除く19部局。

2 「研究者総数」：常勤教員数（寄附講座等教員、特任教員を含む）。

広報・社学連携室

多目的ディスプレイの設置

大学構成員の学内コミュニケーションの活性化をはかるため、パナソニック株式会社様のご協力により、様々な情報発信をおこなうシステム「O + PUS (Osaka university and Panasonic Universal Sight)」(オーパス)の運用を6月1日(月)から開始しました。

このシステムで様々なコンテンツを放映することによりイメージ・リテラシー教育の充実をはかり「知的なだけでなく、鋭敏な感受性を持った学生」の育成を目指します。

なお、プラズマディスプレイ14台及び放映システム(NMステージ)は、ディスプレイの活用趣旨にご賛同いただいたパナソニック株式会社様よりご寄附いただいたものです。

ホームページをリニューアルしました

ウェブデザインユニットを中心に作業を進めてまいりました公式ホームページを、6月1日(月)からリニューアル公開しました。

リニューアル後のホームページでは以下の点を重点項目として改善にあたりました。

閲覧者が目的の情報をより速やかに得ることができるように、階層構造及びターゲット別メニューを見直すとともに、それぞれのターゲットメニューページの内容についても充実

色弱の方への配慮、読み上げブラウザへの対応などユニバーサルデザインに留意したデザイン

日本語版ページと全く異なるページ構成となっていた英語版ページを、日本語ページと同じページ構成とし、それぞれのページが相互にリンクするように変更

さらに、近年の携帯電話などによるウェブブラウジング環境の変化を見据え、アクセスや入試情報など一部のページに限り閲覧可能な携帯向けサイトを作成し公開します。

大阪大学中之島講座 夏季講座「抱きしめまっせ 天神祭」

大阪大学中之島講座は、大阪大学の研究成果を社会に還元する一環として開放講座という名前で1968年に始まり、今年で41回目を迎える伝統的な講座です。広報・社学連携室の下に運営委員会を置き、多くの人たちに大阪大学の知を提供させていただくため毎年その企画に各委員が知恵を絞っています。

今年の講座の特色として、例年開催する秋季講座とは別に、大阪夏の風物詩「天神祭」を更に楽しんでいただくための 夏季講座スペシャル を新たに企画し、現代の学問の府である大阪大学が、時空を超えて学問の神様の祭をひもとく講座を開催します。

日 時：平成21年7月20日(月・祝)午後1時～5時(予定)

会 場：大阪大学中之島センター 10階 佐治敬三メモリアルホール

講演1 「天神祭を描いた絵いろいろ～華の浪速の色模様～」 大阪大学総合学術博物館教授：橋爪節也

講演2 「天神祭の歴史と構造 ～御迎人形の楽しみ方～」

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター招へい教授

大阪天満宮文化研究所研究員：高島幸次

映 画 「火と水の祭典 天神祭」上映

展示企画

・第1会場：10階ロビー(展示期間：7月20日(月・祝)のみ)

絵画「天満天神祭(大阪)」宮本順三(大阪大学大学院経済学研究科所蔵)、スケッチ等

・第2会場：1階ロビー(展示期間：7月20日(月・祝)～24日(金))

御迎人形ロボット「牛若丸」(wakamaru：(株)三菱重工製)

(このロボットは、7月25日(土)天神祭当日、阪大船に乗船します。)

国際交流室

短期留学受入プログラムの現状と今後

本学が主として学術交流協定校（学生交流覚書付き）から短期（3か月以上1年未満）で受入れる全学的プログラムには、現在、OUSSEP、MAPLE および FrontierLab@OsakaU の3種類があります。また従来からの交換留学生（部局分散と称しているものおよび部局間協定に基づく交換留学生）も加えると、短期留学で本学に滞在する学生数は年間200名近くになります（表1参照）。

留学生30万人計画という方針が政府から出されていることは周知のとおりで、本学も今後相当数の留学生増（10年間で少なくとも倍増）が期待されています。学位を取得できるコースへの留学生受入れを進めることが基本的に重要ですが、一方、短期の留学生受入れを進めることも必要で、今後、上記の3プログラム以外に外国人学生にとって魅力のある短期留学プログラムを開発してゆきたいと考えています。部局でこうした短期受入プログラムを企画されるようでしたら、国際企画推進本部までご連絡下さい。同本部は昨年、FrontierLab@OsakaU を新たに企画しましたので、ノウハウが蓄積されており、プログラム開発を効率的に行う（現場の教職員の負担を減らす）上で有用であると考えています。

表1 短期留学生受入数

プログラム名等	春学期受入開始*	秋学期受入開始予定**	年間受入れ数
OUSSEP	10	46	56
MAPLE	0	52	52
FrontierLab	12	25	37
大学間協定（部局分散）	15	26	41
部局間協定	1	7	8
合計	38	156	194

* 春学期在籍者数は136 ** 秋学期在籍者数は156

超短期受入プログラムの認定へ向けて

超短期受入プログラムとは短期より短い（2週間～1ヵ月程度）期間受入れるプログラムを指します。このような短い期間での受入れは、学生の身分が不定でなかなか正式なプログラムとはならず、本学の留学生数にはカウントされないという残念な状況でした。しかし、最近では、比較的簡便な超短期プログラムへのニーズが高くなり、実際、外国からのリクエストに応じて新たなプログラムの企画を考える部局も増えてきています。このような企画を支援するため、一定の要件を満たすプログラムについては、今後、国際交流室で審議の上、本学が提供するプログラムとして認定し、留学生の受入れを可能とする方向で検討を進めています。留学生センターでは、平成20年度大学教育改革推進等補助金を得て、今年の春に Inside Japan という超短期プログラムを企画実施しました。その報告書では、要件が整理されていますし、企画を進める上でのノウハウが順を追って記載されていますので、参考資料として有用と思います。ご活用下さい。

AEARU サマーキャンプ2009 / APRU サマープログラム2009

東アジア研究型大学協会（Association of East Asia Research Universities：東アジアを代表する17大学が加盟）では各種の行事を行っていますが、今年の夏は本学がホスト校に名乗りを挙げ、教職員10名と学生委員30名が中心となってAEARU サマーキャンプ2009 ホストチームを構成し、2009年8月16日～23日（7泊8日）の日程でサマーキャンプを企画しています。テーマは Think and Act: How We Can Contribute for the Next Generation で、JICA 大阪国際センターと連携し、参加する学生たち（各大学4名合計約70名を予定）に日本や関西の良さを伝え、阪大の研究・教育環境を海外の参加者に体験してもらい、阪大生との交流を通じて双方の国際理解に資することを目標としています。オリエンテーションをはじめとし、レセプション、キャンパスツアー、研究室訪問、セミナー、ワークショップ、サイトビジット（ハイテク工場など）、関西歴史ツアー、そしてJICA 大阪国際センターが実施する研究プログラムへの体験参加など、盛り沢山の企画がなされるようですが、多くの学生諸君が委員として参加し、活発な意見が交わされ盛り上がりつつあるようで、大変頼もしく思っています。

一方、環太平洋大学協会（Association of Pacific Rim Universities）でもサマープログラム（APRU Undergraduate Summer Program）が行われています。昨年までは復旦大学がホスト校でしたが、今年はシンガポール国立大学がホスト校となり、“Rising to the Challenge - Global Student Leadership in the 21st Century” というテーマで7月13日～24日に行われます。学内で毎年参加を呼びかけていますが、応募者が少ないのが悩みでした。しかし、今年は2名の定員枠に20名以上の学生諸氏が応募しました。国際交流室APRU/AEARU 学内ワーキングで選抜を行いました。優秀な学生が多く集まりなかなか難しい選抜だったようです。国際交流活動に関心を持つ学生諸氏が大量にいることがわかり、国際交流室としては大変喜ばしく思うとともに、これらの学生諸氏に国際交流活動に参加する機会をさらに増やして行きたいと考えています。

大阪大学 多目的ディスプレイ 「O+PUS(オーパス)」 運用開始

ウェブデザインユニット

6月1日(月)より学内構成員のコミュニケーション活性化のため、ディスプレイの活用趣旨にご賛同いただいたパナソニック株式会社様からご寄附いただいた大型ディスプレイを、学内14カ所に設置し様々な情報発信をおこなうシステム『大阪大学多目的ディスプレイ「O+PUS」』の運用を開始しました。

O+PUS : オーパス (Osaka university and Panasonic Universal Sight) とは

OとPの間にプラス記号を配置し、大阪大学とパナソニック株式会社様の関係を視覚的に表現しました。大阪大学とパナソニック株式会社と私たちという関係も表しています。

OPの組み合わせはOPENをPUSはP(L)USを発想させ、これらは開かれたこのシステムのイメージと一致しています。

またopus本来の英単語としての意味は文芸作品や著作という意味を持っています。学生から、また

は大学からの創造的提案がこのシステムを通じてなされることを期待しています。

O + P U S

Osaka university and Panasonic Universal Sight

オーパス : ログタイプ

O+PUSの意義

このシステムでは、今までありがちな大学側から一方的に発信される情報だけでなく、学生がコンテンツ制作に参加するものや、フルハイビジョンによる高精細な画像を使ったコンテンツなど、学生が興味を持ち積極的に参加したくなるコンテンツを放映します。

準備中のコンテンツでは、自分でも見ることの出来ない「感情」や「感受性」を、映像や言葉に写すことにより、自分の感情が確かなカタチを持つようになり、今まで見えていたモノが違って見える「まなざしの異化効果」を感じられるようなものや、他者とのコミュニケーショントレーニングを促進するものなども検討されています。

この取り組みにより、イメージ・リテラシー教育の充実をはかり「知的なだけでなく、鋭敏な感受性を持った学生」の育成を目指します。



オーパス設置風景

Contents | さまざまなコンテンツ

当面のコンテンツ

- 学生が授業の一環で制作した映像 (CSCD など)
- 録画された授業の映像 (OCW など)
- 大学主催のイベント情報
- 大学からのお知らせなど

将来のコンテンツ

- 学生参加による独自コンテンツの作成
- 各研究室による研究テーマの簡単な紹介映像
- ハイビジョンコンテンツの放映
- 風景・美術関係の映像等

O+PUS やコンテンツに関するお問い合わせ先

opus@wdu.osaka-u.ac.jp (ウェブデザインユニット)

設置場所

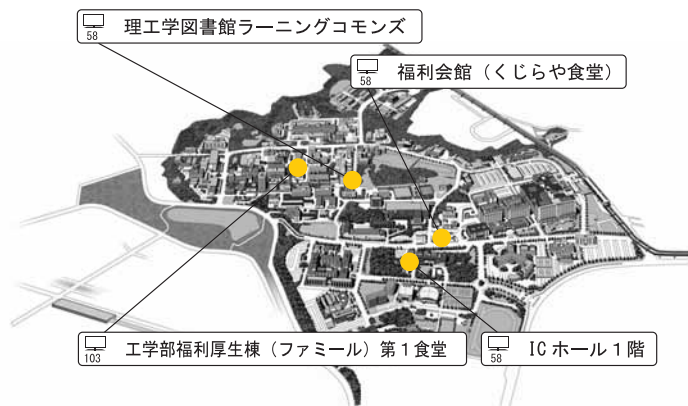
情報提示の主たる対象が学生であるため、学生が多く集まる場所をベースに検討を進めました。
また、部局に偏りが発生しないように、かつ、音を出しても良い環境を考慮に入れて検討しました。

は平成 21 年度内設置

豊中キャンパス：7 台



吹田キャンパス：4 台



箕面キャンパス：2 台



中之島キャンパス：1 台

第4回新任教員研修開催

桜の花のほころぶ3月27日(金)、豊中キャンパス文系総合研究棟(301教室)において、第4回新任教員研修が開催されました。

この新任教員研修は、2009年度に初めて共通教育の授業・実験を担当する常勤あるいは非常勤教員を対象として実施されました。対象者は104名で、その内42名(専任教員31名、非常勤講師11名)が出席し、その他関係教員11名が参加しました。

研修では、まず小泉潤二理事・副学長が「大阪大学の教育目標」についてビデオ映像により講演されました。大阪大学の教育目標である教養、デザイン力、国際性の追求のもと、教養教育では広い視野に立った確実な判断力を身につけさせるため、さまざまな制度や環境を整えつつあることが紹介されました。



ことが紹介されました。

次に、高杉英一理事・副学長が「大阪大学の歴史」について講演されました。

大阪大学は適塾、懐徳堂の精神を受け継ぐこと、また、大学の創設期の話など交えながら当学が全国的にも誇れる歴史を有していることを強調し、これを学生たちにも伝えていただくよう話がありました。さらに、工藤眞由美大学教育実践センター長が、「大阪大学における共通教育の理念」について話をされました。センターでは、大阪大学のグランドプランに則り、また全国的にも特色のある全学出動方式をとりつつ、対話型教育中心とした新たな共通教育を目指していることなどに触れられました。最後に、山成数明教育実践研究部長が「共通教育のしくみ」と題して、共通教育のカリキュラム構成、様々な場合における学生への対処の仕方、新学務情報システムなど、「授業担当教員マニュアル」に関係する実践的な情報について説明されました。

質疑の時間には、KOANのパスワードや成績の標準化について質疑応答が出され、また、新型基礎セミナーに関する補足説明などが行われました。参加者のアンケート結果から、「参加して自分の授業改善の参考になった」という肯定的な回答が6割を超える先生方からあり、参加者に有用な情報を伝達できたと考えています。

(大学教育実践センター)

平成21年度・共通教育ティーチング・アシスタント研修開催

平成21年度の共通教育授業科目を担当するティーチング・アシスタント(以下、TA)を対象とした研修が、4月7日(火)に、大学教育実践センターの大講義室で行われました。TAは学生であると同時に教育指導も行うものであるため、TAの力量向上と円滑な活動を支援するために実施されたものです。参加者はTA97名、教職員9名でした。

プログラムの開始に先立ち、司会の山成数明教育実践研究部長から、この研修の趣旨説明および講師の紹介がなされました。

プログラムのはじめには、工藤眞由美大学教育実践センター長により、「大阪大学の共通教育について」と題して講演が行われました。講演では、共通教育における「教養」の意味が説明されたのち、本センターが現在力を入れている活動(たとえば学生教職員懇談会、スチューデント・コモンズなど)が紹介されました。

次に、窪田高弘カリキュラム開発部門長(前TA活用専門委員会委員長)から、TAの位置づけと業務等について説明がなされました。その中で、共通教育のTAは教育の練習の機会であることが強調され、TAは雑務処理であってはならないと述べられました。また、勤務表に関することをはじめ、就業規則に関しても説明が行われました。

さらに、「TAの業務を遂行するにあたって」と題して、服部憲児FD推進部門副部門長から、



業務における具体的な手続きの説明がなされました。スケジュールや施設の利用に関して、教員マニュアルからの抜粋資料をもとに解説が行われました。また、必ず行うべき事項として、「シラバスを見る」、「先生との連絡を密にする」、「学生には丁寧に接する」の三点が挙げられました。

質疑応答では、服装に関することや事務書類の扱いなどに関して質問がなされ、教職員から回答および補足説明が行われました。最後に、本研修に関するアンケートに回答(90名が回答)をいただき、閉会しました。アンケート結果では、参加したTAの85%以上が「参加して有意義だった」と回答しており、有用な情報を伝達できたものと考えています。

(大学教育実践センター)

理学研究科技術職員研修(学内研修および学外研修)実施

理学研究科技術部では、平成4年度より専門技術の知識・技術・技量等の向上を目的として技術職員研修の企画・運営を行っており、11月14日(金)に「学内研修」を実施し、3月9日(月)、10日(火)に「学外研修」として平成20年度京都大学総合技術研究会に参加しました。

学内研修では、渡會 仁理学研究科技術部運営委員長の開講の挨拶を皮切りに、東島 清研究科長による技術賞表彰に続き講話と講義「2008年のノーベル物理学賞—南部理論と小林・益川理論について—」、宇宙地球科学専攻の中嶋 悟教授による講義「地球環境の聴診器の開発」を受講しました。午後から西山正夫事務長による講話「裁判員制度について」、さらに平成20年度理学研究科技術賞受賞者である大濱光央技術専門員・坂本道夫・櫻井太郎技術専門職員による受賞発表に続き、初めての試みとして、技術発表に情報科学研究科小泉文弘技術専門職員をお招きしました。そのあと各技術職員による技術発表、グループ研究発表を行い、平成20年度も大変有意義な研修にすることが



ができました。

また、例年、理学研究科を離れ、他大学、研究所または企業等の見学・セミナー・講習等を行っている学外研修は、3月9日(月)、10日(火)に開催された平成20年度京都大学総合技術研究会(以下、総合技術研究会と略す)に参加しました。

この総合技術研究会は、東北大学、東京大学、大阪大学、名古屋大学と2年毎に開催されており、年々規模が拡大しています。この研究会に、次の目的で参加しました。

1. 新しい技術、創意工夫や失敗談などの情報収集と技術交流
2. 他機関の技術職員との交流
3. 各自の教育・研究支援業務の発表

初日の午前は、京都大学百周年時計台記念館において開会式があり、松本 紘京都大学総長の歓迎の挨拶、大鷹幸一郎技術部長の特別講演がありました。午後からは、各技術分野の口頭発表があり、それぞれ関連する技術分野に分かれて出席し、夕刻には情報交換会が催されました。

2日目の午前は、各技術分野の口頭発表があり、午後からポスター発表がありました。これと並行して「特別公開講座」および「見学会」が行なわれました。

今回の総合技術研究会は、11技術分野が開催され、全国から950名を超える技術職員が参加しました。理学研究科技術部からは18名が参加し、4技術分野に8名8件の発表を行ないました。それぞれの分野で様々な意見交換を行ない、大変有意義な研修となりました。

(理学研究科・理学部)

タイ・マヒドン大学訪問団来訪

4月8日(水)大阪大学と学術交流協定を締結しているタイ・バンコクのマヒドン大学 Theeralaksna Suddhasthira (ティーララック・スッタサティン) 歯学研究科長ら10名が歯学研究科及び歯学部附属病院を訪れました。

米田俊之歯学研究科長、大嶋 隆歯学部附属病院長との面談の後、脇坂 聡副研究科長による歯学部・歯学研究科における教育システムの概要、米田研究科長による研究推進状況紹介のプレゼンテーションを行いました。その後の質疑応答では、日本とタイの教育制度や歯科臨床システムの違い、昨年度から文部科学省大学院教育改革支援プログラムに採択された、本研究科の大学院教育改革支援プログラム等について質問が活発にあり、将来的な教員・学生交流構想や臨床および基礎的共同研究体制の確立などについても盛んに意見交換が行われ、終始和やかな雰囲気での懇談が進みました。

その後一行は、歯学部附属病院内の各診療科の診療状況や診療設備等を見学し、担当者による説明を熱心に聞き入っていました。



引き続き、昼食会が催され、親睦を深めました。両研究科の学術学生交流推進に向け前向きに協力していくことを確認した表敬訪問となりました。

(歯学研究科・歯学部・歯学部附属病院)

平成21年度大阪大学新入職員研修実施

平成21年度新入職員研修が、4月14日(火)から16日(木)までの3日間にわたりコンベンションセンター及び待兼山修学館等において行われました。

この研修は、新入職員32名を対象として、「職員としての自覚と意識の確立を図り、新入職員として必要な基礎的知識・技能を身につけ、職場への適応力を養う」ことを目的として実施されたものです。

開講式では、鷲田清一総長から「大阪大学グラウンドプラン」の内容を交えながら、本学職員としての職務を認識するとともにスキルアップに努めていただきたい旨、激励の言葉がありました。その後、外部講師から「社会人の心構えを身につけること」、「主体性を養うこと」、「コミュニケーション力強化」等について2日間にわたり講義・演習が行われました。

3日目は、国立民族学博物館において、出向職員との面



鷲田総長の挨拶



外部講師による演習

談等が行われました。その後、豊中キャンパス待兼山修学館に会場を移動して、月岡英人理事・副学長から大阪大学の概要や阪大スタイル等についての講話が、江口太郎総合学術博物館長から大阪大学の歴史を理解し、親しみと愛情をもって仕事に取り組んでもらうことを目的として同館の説明が、高杉英一理事・副学長から「大阪大学の歴史」の講義が行われました。

閉講式では、月岡理事・副学長から修了証書授与の後、この研修で学んだことを実際の業務を行う際に活用いただくとともに、大阪大学のために活躍いただきたい旨、激励の言葉がありました。

この研修を通じて受講者は、お互いに親睦を深め合うなど有意義な時間を共有するとともに、3日間の研修を全員、無事修了しました。

(総務部人事課)

法科大学院認証評価「適格認定証」授与

4月22日(水)に、総長室において法科大学院認証評価「適格認定証」の授与が行われました。

この法科大学院認証評価とは、学校教育法において定められた専門職大学院認証評価の一つで、法科大学院の教育活動等の状況が評価基準に適合しているか否かの認定を通じて、その質を保証することを目的としているものです。

本学では、平成20年度に、(独)大学評価・学位授与機構による法科大学院認証評価を受審し、このたび、同機構が定める法科大学院認証評価基準に適合している、との適格認定を受け、同機構より、適格認定証及び適格マークが交付されました。

当日は、高杉英一理事・副学長(評価室長)列席のもと、鷲田清一総長より、松川正毅高等司法研究科長に適格認定証が授与されました。

(企画部評価課)



適格認定証を囲んで
(左から高杉理事・副学長、鷲田総長、松川研究科長)

レーザー研シンポジウム2009 - 平成20年度共同研究成果報告会 - 開催

レーザーエネルギー学研究センターでは、4月23日(木)、24日(金)の2日間にわたり「レーザー研シンポジウム2009 - 平成20年度共同研究成果報告会 -」を医学部銀杏会館にて開催いたしました。

シンポジウムは囃地 宏センター長、米田仁紀共同研究専門委員会委員長(電気通信大学)の挨拶で始まり、7件の口頭発表、128件のポスター発表が行われました。さらに、今年から新たな試みとして、共同研究専門委員会の主導でプログラムを編成した8件の講演と、37歳以下の発表者を対象とした「ベストポスタープレゼンテーション賞」を実施しました。



囃地センター長挨拶

また、シンポジウムでは、第3回大阪大学近藤賞の授与式も行われ、科学賞、技術賞の2名の受賞者



第3回近藤賞授与式

左から米田審査委員長、受賞者(宮永氏、藤岡氏)西田理事・副学長

に鷲田清一総長の代理として、西田正吾理事・副学長から賞状と副賞が授与されました。最後に岡村昇一共同研究専門委員会副委員長(核融合科学研究所)から閉会の辞が述べられシンポジウムは閉会しました。

(レーザーエネルギー学研究センター)

理工学図書館改修披露式典実施

附属図書館・理工学図書館(旧・吹田分館)では、このほど耐震改修工事が完了したことを受け、改修披露式典を4月28日(火)におこないました。

小泉潤二理事・副学長(附属図書館長)の式辞、鷲田清一総長の挨拶に続き、平尾俊一副館長(理工学図書館担当)を加えた3名によるテープカットがおこなわれ、その後、新装なった理工学図書館の見学会がおこなわれました。

理工学図書館では、この耐震改修工事にあわせ、自主的・自立的な学習活動を支援するための「学びの場」、「創造の場」、「発想の場」である「ラーニング・commons」を新たに設置し、情報機器の増設、可動式の机・椅子を配置することにより、グループでの学習や議論をサポートすること



鷲田総長の挨拶



小泉理事・副学長
附属図書館長の式辞



テープカット

のできる「話せる図書館」スペースを新設しました。このラーニング・commonsには、ティーチング・アシスタントを配置し、図書館の利用や学習をサポートしていく予定です。また、新たに館内利用のための貸出用のノートPCも用意しています。

大型ディスプレイを備えた図書館ホールの収容人員を100席に増席したり、個性的な机と椅子を設置したグループ学習室、明るく見通しのよくなった閲覧室など、施設・設備を改修前に比べ格段に充実させました。このように充実した施設・設備が学習・研究のために十二分に活用されることを期待しています。

(附属図書館)

総長への表敬訪問

4月2日(木) 本学と大学間交流協定を締結しているフィリピン・デ・ラ・サール大学のBr. Armin A. Luistro FSC 大学長が、鷲田清一総長を表敬訪問しました。懇談には、辻 毅一郎理事・副学長、理学研究科より東島 清研究科長、笠井俊夫教授、工学研究科より笠井秀明教授、Dr. Melanie Yadao David 特任助手、田中玲子特任研究員、江藤靖弘国際交流課長が同席し、笠井秀明教授から本学とデ・ラ・サールの活発な学术交流の様子が報告されました。また、今後のさらなる研究交流や学生交流についての意見交換が行われました。



同日、夕刻からは、ドイツ・ベルリン自由大学法学部のDr.Philip Kunig 教授が、鷲田総長を表敬訪問し、辻理事・副学長、竹中 浩法学研究科教授、松本和彦高等司法研究科教授、竹中 亨文学研究科教授、石野隆志学生交流推進課長と今後のエラスムス・コンソーシアムについて、意見交換を行いました。



4月10日(金) Gilles M.Honegger ロータリー・フランス GSE プログラム 団長が、鷲田総長を表敬訪問しました。懇談には、辻理事・副学長、松川正毅高等司法研究科長、和田章男文学研究科教授、古城紀雄特任教授 (IFReC)、石野学生交流推進課長が同席し、パリ第一大学 (パンテオン・ソルボンヌ) との交流協定の可能性について懇談しました。

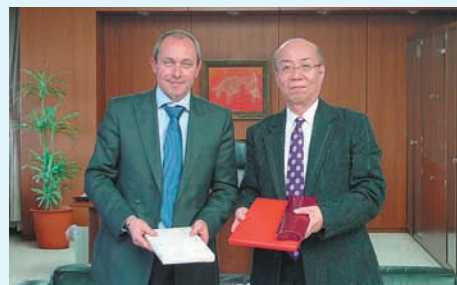
その後、Honegger 団長は、本学フランス人留学生と親交を深め、留学生センターの有川友子教授、瀬戸山晃一准教授の案内で、留学生交流情報室 (IRIS) を見学しました。



4月14日(火) Mr. Prayoon Shiwattana タイ・国立科学技術開発機構 (NSTDA) 副所長 が、鷲田総長を表敬訪問しました。懇談には、辻理事・副学長、生物工学国際交流センターの原島 俊センター長、仁平卓也教授が同席し、さらなる日本とタイの研究協力について懇談をしました。



引き続き、同日 15 時からは、Prof. Denis Bertin フランス・プロバンス大学筆頭副学長と Sadruddin Benkadda フランス国立科学研究機構 (CNRS) 教授が鷲田総長を表敬訪問し、将来的な日仏情報国際研究所・CNRS LIA (Laboratoire International Associé) やプロバンス大学との学术交流について意見交換を行いました。



(国際部国際交流課)

基礎工学部・基礎工学研究科初任教員研修会実施

基礎工学研究科では、5月1日(金)に「平成21年度基礎工学部・基礎工学研究科初任教員研修会(初任者FD)」を同研究科会議室において実施しました。

この研修会は、新たに赴任され基礎工学部・基礎工学研究科の教育研究を担当することになった教員を主な対象に、大阪大学、基礎工学部、基礎工学研究科の現状についての



認識を深めるとともに、大学教育を担当する教員として、教育に関する力を高めることを目的として平成15年度から実施しているものであり、今年度の研修会には、基礎工学研究科及びナノサイエンスデザイン教育研究センターから21名の教員(教授3名、准教授4名、助教14名)の参加がありました。

当日は、西田正吾理事・副学長による「大阪大学の教育・研究の目標と運営の方針」の講演に始まり、戸部義人研究科長による「基礎工学部の概要」の後、三宅和正教授による「基礎工学部の入試」、新井健生教授による「競争的研究資金の獲得の重要性と研究者の倫理」、岡村康行教授による「学生のメンタルヘルスケア」、飯國洋二教授による「セクハラ・アカハラ防止の重要性」と続き、最後に谷口康昭事務長による「大阪大学と基礎工学研究科の事務処理」についての講演が行われました。

参加した21名の教員は、受講生という立場でメモを取りながら熱心に聞き入っていました。

(基礎工学研究科・基礎工学部)

いちよう祭開催

5月1日(金)及び5月2日(土)の両日に、本学の創立記念日を祝し、全学を挙げて新入生を歓迎するとともに教職員、学生の親睦及び地域との連携を図ることを目的とした「いちよう祭」が開催されました。

今年度は吹田キャンパス、豊中キャンパスの2つのキャンパスで学内施設開放、展示会、講演会、園遊会等が行われました。

新入生のほか、大阪府下の各高等学校など学外の方々へ広く参加を呼びかけ、多数の参加者が訪れました。



(総務部総務課)

体育会六賞及び課外活動総長賞表彰式開催

5月1日(金)のいちょう祭において、平成20年度の体育会六賞及び課外活動総長賞の表彰式が豊中キャンパスのメインステージで行われました。爽やかな晴天の下、受賞団体部員の他一般学生も多数集まって賑やかな雰囲気の中、表彰式は行われました。

今回の体育会六賞は以下の団体及び選手が受賞しました。

「赤堀賞」少林寺拳法部

「赤堀賞」とは年間最優秀クラブに贈られる賞です。少林寺拳法部は、少林寺拳法創始60周年記念大会で優良賞3件、2007年度少林寺拳法関西学生新人大会で最優秀賞5件、優秀賞4件、敢闘賞5件で総合優勝するなど、輝かしい成績を収めました。また、今年インドネシアで開催される世界大会への出場も決定しています。

「会長賞」水泳部 瀧下雄大君

「会長賞」とは年間最優秀選手に贈られる賞です。水泳部の瀧下雄大君は、JAPAN オープン2008の男子平泳ぎで4位(学生では1位)、全国公立選手権100m平泳ぎ2位、50m自由形3位など、すばらしい成績を収めました。

「釜洞賞」該当なし

「釜洞賞」とは年間で最も特色のある活動を行ったクラブに贈られる賞ですが、20年度は受賞団体はありませんでした。

「熊谷賞」テコンドー部(女子)

「熊谷賞」とは年間最優秀女子クラブもしくは選手に贈られる賞です。テコンドー部は、第1回全日本テコンドー選手権大会で白川明代さんが女子フェザー級3位、第1回全日本学生テコンドー選手権大会で白川明代さんが女子フェザー級優勝、藤本江里菜さんが女子フィン級優勝、古家亜紗美さんが女子フライ級優勝(MVP)など、特に女子選手がすばらしい成績を収めました。

「山村賞」女子バレーボール部

「山村賞」とは七大戦において顕著に活躍したクラブ、とりわけ前年度より著しく順位が上昇したクラブに贈られる賞です。女子バレーボール部は前年度最下位という汚名を返上し、2位という結果を収めました。



「宮原賞」アーチェリー部、自動車部、少林寺拳法部、ソフトボール部、水泳部(男子)、水泳部(女子)、女子卓球部、ラクロス部

「宮原賞」とは七大戦において優勝を収めた全てのクラブに贈られる賞です。今年度は上記8団体が受賞しました。

また、学生の課外活動の充実と更なる活発化を図ることを目的として、前年度において特に優れた活動を行った学生団体等を表彰する「課外活動総長賞」は、学内の全ての課外活動団体等から公募を募り、応募のあった団体等の様々な活動結果について学生生活委員会において選考した結果、24件の応募から以下の7団体等が選出され、第10回「課外活動総長賞」を受賞しました。

最優秀賞

岸田 諭君(競技かるた会)

「第55期かるた名人位決定戦」で準名人位に輝いたことが高く評価されました。

優秀賞

少林寺拳法部、アメリカンフットボール部、舞踏研究会

特別賞

卓球部、交響楽団、大阪大学フォーミュラレーシングクラブ

(学生部学生支援課)

人権問題に関する映画会開催

人権問題に関する映画会が、憲法週間中の5月1日(金)に文系総合研究棟で開催されました。

この映画会は、人権問題啓発行事の一環として毎年行っているもので、今年度は人権問題全般について認識を深めてもらうため、次の2作品を上映しました。

「アイム ヒア 僕はここにいる」(障害者理解)

「ここに咲く花」(いじめ問題)

午前・午後2回の上映で、教職員・学生等約50名の参加者があり、最後まで熱心に映画を鑑賞しました。

人権問題に対する正しい理解と認識を深めるため、引き続き各種行事を予定していますので、みなさまの積極的な参加をお願いします。

(人権問題委員会)



司会の杉江正敏人権問題委員会委員
(大学教育実践センター教授)

第4回ホームカミングデイ開催

(トピックスからの続き)

講演後、場所を移し「館下食堂」にてレセプションを、同じく武田理事・副学長の司会により、経済学部卒業の山本信孝氏(元UFJ総合研究所会長)による乾杯でスタートしました。

会場では、学生軽音楽サークル「SWING」の軽快な音楽をBGMに、参加された方々の思い出話にも大いに花が咲き、本年も協賛いただいた企業等から景品をご提供いただき抽選会が催され、大いに盛り上がりました。この場を借りてご協力いただきました企業等の皆様に御礼申し上げます。



山本氏による乾杯



レセプション風景

ます。会場内では、旧交が温められ笑顔の中での散会となりました。

ご多忙のところご来場いただきました皆様には、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

なお、来年のホームカミングデイもご家族、ご友人お誘いあわせの上、是非とも大阪大学へお越しいただきますようお願い申し上げます。

(企画部広報・社会学連携事務室)

大阪大学室内楽アンサンブル第8回演奏会開催

大阪大学室内楽アンサンブル(OUCE Osaka University Chamber Ensemble)の第8回演奏会が5月2日(土)に、大阪大学コンベンションセンターMOホールにて開催され、大学関係者、近隣にお住まいの方などを中心に約180名の方にお越しいただきました。

今回は、新メンバーが多数入ってきたことで、これまでになく、充実したアンサンブルを紹介させていただくことになりました。2本のヴァイオリンのみで演奏するルクレール(バロック時代の作曲家)のソナタで始まり、モーツ



アルト、チューベルト、ウェーバー、チャイコフスキーと、室内楽の分野でも多数の名曲を残した作曲家のアンサンブルの演奏、そして最後は弦楽合奏にフルート、ピアノまで加わる総勢21人による大合奏で、グリーンスリーブスによる幻想曲を演奏し、盛況のうちに演奏会を終えることができました。今後も趣向をこらしたプログラムで、皆様に楽しんでいただける演奏会を企画してまいりますので、どうぞこれからもご支援いただき、演奏会へ足をお運びくださいますようお願い致します。

第9回演奏会は、11月3日(火・祝)を予定しております。大阪大学で、日常的に音楽を楽しむ時間を持ち、文化の種を育てることが、OUCEの目指すところであります。主婦で研究員のメンバーもいますが、忙しい合間を縫ってアンサンブルを楽しんでいます。是非皆様お誘い合わせの上、お越しください。

OUCEの活動は、ホームページ(<http://orchestra.musicinfo.co.jp/ouce/>)*をご覧ください。

♪ただいまメンバー募集中♪ 特に弦楽器奏者の方、お待ちしております

(OUCE)

歯学部附属病院で「ふれあい看護体験」実施

歯学部附属病院では、『ふれあい看護体験』を5月12日(火)に『看護の日のイベント』を14日(木)に実施しました。

『ふれあい看護体験』は、口腔外科病棟で、将来看護師を目指す高校生の看護体験者を受け入れ、入院患者のベッド作りや手術室までの搬送、また、談話や洗髪、清拭、経管流動食の準備、食事の配膳、病院食の試食等を体験してもらうもので、参加者からは「看護体験を通していっそう看護師になりたいという気持ちが強くなった」や「総合病院とは一味違うよい経験をさせてもらえてよかった」とい



ううれしい感想をいただきました。

一方、『看護の日のイベント』では、1階ロビーにおいて「口腔乾燥症」や「虫歯・入れ歯」に関する看護相談がおこなわれました。看護師達がパンフレットやビデオにそって器具や医療材料の説明をし、延べ100人ほどの患者様が集まりました。患者様からは、「掲示をみて相談のためだけにきた」「ためになった」「診療時間内では聞きにくいことが身近に相談できてよかった」との声が聞かれました。

(歯学部附属病院)

事務系職員の評価制度に係る評価者研修実施

事務系職員の評価制度に係る評価者研修が、5月27日(水)にコンベンションセンターにおいて実施されました。

この研修は、事務系職員の評価制度において、第一評価者、第二評価者及び調整者となっている教職員のうち、過去に実施した当該研修を受講していない者を対象とし、評価を職員の能力開発や人事管理に活かしていくためには、評価の透明性、納得性、公平性を高めていく必要があり、誰が評価を行っても同じ水準を保てるよう、評価者の能力向上を図ることを目的としたもので、61名が受講しました。

外部講師の挨拶の後、午前中は外部講師による講義・演習が、午後はグループ討議等を中心に演習が行われました。グループ討議では受講生の活発な意見交換が行われ、また、講義・演習後も外部講師に質問を行う受講者もあり、好評のうちに修了しました。

(総務部人事課)



大学院情報科学研究科情報系先端融合科学研究棟竣工披露式典・懇親会を開催

大学院情報科学研究科は、情報系先端融合科学研究棟（地上7階、地下1階鉄筋コンクリート造、延床面積6,599m²）が吹田キャンパスに完成したことを記念し、6月5日（金）に竣工披露式典、見学会及び懇親会を開催いたしました。

披露式典では、学内外から100名を超える出席者があり、井上克郎副研究科長の司会により、今瀬 真情報科学研究



今瀬研究科長の式辞



岡技術参事官の祝辞



新棟を見学する来賓の方々

科長の式辞が述べられ、続いて鷲田清一総長から挨拶が述べられた後、岡 誠一文部科学省大臣官房文教施設企画部技術参事官、大竹伸一西日本電信電話株式会社代表取締役社長の祝辞がありました。

引き続き、新棟の見学会が行われ、出席者は各階で紹介された文部科学省グローバルCOEプログラムをはじめとする研究・教育プロジェクト等を興味深く見学されました。見学終了後、新棟1階ホールにおいて開かれた懇親会では、学内外の来賓・関係者が参加し、終始和やかな雰囲気の中が懇談が行われ、竣工を祝いました。

（情報科学研究科）

阪大東口完成式開催

豊中キャンパス東口環境整備が完了し、6月6日（土）に、柴原まちづくり協議会、大阪大学が主催となり、「阪大東口完成式」が開催されました。豊中市立第二中学校吹奏楽



部による演奏、浅利敬一郎豊中市長、西田正吾理事・副学長らによるテープカット、関係者、地域の方々、豊中みどり幼稚園の園児らも参加してスロープ公園を通る「通り初め」が行われました。また、地域の歴史や将来像について地域住民と関係者が楽しく語り合う「大学のある街・ラウンドテーブル」が催されました。



豊中キャンパス東口環境整備の詳細については阪大NOW No.107（2008.12月号）を参照下さい。

本整備は第19回「緑のデザイン賞」の「緑化大賞」を受賞しています。受賞については、本号の表彰等（41ページ）に掲載しています。

（キャンパスデザイン室、施設部）

身体と性を研究するということ

大学院文学研究科教授 荻野美穂

大阪大学では女性教員は少ないが、学生・院生には女性が多い。最終講義ではそうした女性たちへのエールの意味をこめて、自分がどのようにして研究者の道に入り、性と身体を研究テーマとして選んだのか、また性別や身体についてどのように考えているのかについて、ライフ・ヒストリーを交えながら話をした。大学卒業後、主婦として子育てをしていた時期に女性学に出会い、女性史を学ぶために30代後半で大学院へ入った。博士課程在学中に『からだ・私たち自身』というフェミニズム運動の中から生まれた本の翻訳にかかわったのを契機に、身体をめぐる問題に関心を抱くようになった。以後、避妊や中絶、生殖技術といった具体的な事例に即しつつ、身体、特に女の身体に対する意味づけや管理が歴史の中でどのように行われ、それが社会や政治面での変化という大きな文脈とどのように関係していたかについて研究を行ってきた。また、脱構築主義的ジェンダー理論を知ったことにより、性についても身体についても「女」と「男」という二項図式を自明の前提として思考するのではなく、むしろ性別二元論が自然化されることによって何が隠蔽され、そこにいかなる権力関係が生じているのかという問題に目を向けることの重要性を、より強く意識するようになった。



おぎの・みほ

プロフィール

略歴：昭和43年神戸学院大学文学部英文学科卒業。昭和60年奈良女子大学大学院文学研究科修士課程修了。昭和62年同大学院人間文化研究科博士課程中退。同年奈良女子大学文学部助手、平成2年同講師、平成5年助教授を経て、平成8年京都文教大学人間学部助教授。平成12年大阪大学大学院文学研究科助教授に着任し、平成17年同教授昇任。平成12年人文科学博士（お茶の水女子大学）。専門は性と身体をめぐる歴史およびジェンダー論。主要著作に『生殖の政治学』（1994、山川出版社）、『共同研究 男性論』（西川祐子と共編著、1999、人文書院）、『中絶論争とアメリカ社会』（2001、岩波書店）、『ジェンダー化される身体』（2002、勁草書房）、『身体をめぐるレッスン2 資源としての身体』（鷲田清一他と共編著、2006、岩波書店）、『「家族計画」への道』（2008、岩波書店）、『性の分割線』（編著、2009、青弓社）。訳書にジョン・W・スコット『ジェンダーと歴史学』（1992、平凡社。増補改訂版、2004）他。

接触方言学の射程 — ネオ方言、ヤマトウチナーグチ、そしてクレオール —

大学院文学研究科教授 真田信治

日本列島における伝統的方言の退潮は時代の大きな流れである。しかし同時にそれに逆行するかに見える小さな渦が発生して、それらが絡みあいながら推移しているのである。私が標準語と方言の間に中間的なスタイルが存在することを認識したのは阪大に赴任してからのものであった。それは関西方言の動態を追う中で把握したものである。「方言」と「標準語」相互の干渉過程で従来の方言にはなかった新しい発話スタイル（語法は標準語でアクセントは関西弁といった話し方）ができつつある状況、一方で、若者たちが、従来の「方言」から、また「標準語」からも逸脱しようとする結果として、そこに中間的な方言スタイルが形成されつつある状況を捕捉したのであった。前者を「クワージ標準語」、後者を「ネオ方言」と名付けて分析しているが、琉球列島における「ウチナーヤマトウグチ」は前者に、「ヤマトウチナーグチ」は後者に対応する。



海外に目を転じると、日本語と台湾のアタール語との接触によって形成された言語変種が台湾東部の宜蘭県大同郷と南澳郷の一部地域に住んでいるアタール人（のすべての世代）によって用いられていることが観察される。その存在は地元では知られていたが、今日まで学術的な研究はまったくなされていない状況にある。今後、この言語変種（クレオール）の調査研究を進めていきたいと考えている。

さなだ・しんじ

プロフィール

略歴：昭和43年金沢大学卒業。昭和45年東北大学大学院修士課程修了。昭和47年同大学院博士課程退学。昭和47年東北大学文学部助手。昭和49年椋山女子大学文学部専任講師。昭和50年国立国語研究所言語変化研究部研究員。昭和57年大阪大学文学部助教授（社会言語学講座）。平成2年文学博士号取得（大阪大学）。平成2年金田一京助記念賞（第18回）受賞。平成3年とやま賞（第8回）受賞。平成5年大阪大学文学部教授。平成11年同大学院文学研究科教授（日本語学）に配置換え。平成16年同大学院文学研究科内に新設された研究推進室の初代室長として研究体制を整備した。学外では、日本語学会理事、日本方言研究会世話人、新村出記念財団評議員などを務める。なお、平成21年4月1日より奈良大学教授となっている。

日本語音声の教育から研究へ

大学院文学研究科教授 土 岐 哲

音声学は、他言語話者への教育が契機となって発展してきた点も多いが、日本語も例外ではない。自らの音声を真に客体化して考える契機になるからで、初めに音声研究があり、その成果を教育現場で活用するだけでも間に合わない。それほど、教育現場には音声学上の具体的課題が豊富である。それらは、旧植民地の日本語学習者による音声などからも知り得る。1980年代終盤からの重点領域研究「日本語音声」は、2つの点で画期的であった。それまで殆ど単音とアクセントに留まっていた研究が、イントネーションの音韻論的研究にも及び、「音声録聞見」等の普及により、文系にも音響分析が導入された。以来、パラメータを限定した観察も可能になる一方で、機器での分析に頼るあまり、言語研究の基本たる人間の鋭い聴覚での分析力の低下を招きかねない事態も発生した。音響分析結果を解析するにも鋭い聴取能力は不可欠である。音声学と音韻論の発想が共に重要なように、分節音研究と超分節音研究のバランスも欠かせぬ故、学生には、方言差、受容傾向の違い、自然発話か否か等、データの収録状況から来る質にも十分注意を払うよう説き続けた。その結果、多様な音声研究が着実に実現されており、国内外での今後の発展も期待される。



とき・さとし

プロフィール

略歴：昭和45年3月早稲田大学第二文学部卒業。昭和46年財団法人国際学会専任講師、昭和49年アメリカ・カナダ11大学連合日本研究センター専任講師、昭和53年プリンストン大学東アジア学部客員講師、昭和55年東海大学講師、昭和57年同助教授、昭和59年名古屋大学総合言語センター助教授、平成2年大阪大学文学部助教授、平成8年同教授に昇任し、平成11年同大学院文学研究科教授。
学会役員：日本音声学会評議員・理事・編集委員、前編集委員長、日本語教育学会元評議員・元常任理事・元学会誌委員長、言語文化教育学会理事、社会言語科学会元編集委員、などを務めた。

日中韓の共生共栄は可能か

大学院法学研究科教授 尹 景 徹

国民国家と産業化は近代文明を出現させ、今日のグローバリゼーションと情報化は新しい文明の出現を予感させている。国民国家の境界がなくなり、政治と経済、社会と文化が統合されるトランスナショナル共同体はその有力な可能性のひとつである。全地球的共同体の形成は遠慮であるが、地域を統合する共同体はすでに実現されている。ヨーロッパは国民国家の枠を守りながら地域的生き方を共有するEUという地域共同体を作った。

近年、日中韓三国の経済的依存度は年々増しているが、一方、ナショナリズムの意識は高まってきている。このような三国間のナショナリズム、歴史、文化などの様々な葛藤を解消するためには、トランスナショナル共同体の形成が最もよい方法であると考えられる。

日中韓の共生共栄は、まず共同体を結成し、各国のナショナリズムを緩和しながらも、東アジアという地域主義は強化させ、三国共通のアイデンティティを確立することによって可能になると思われる。そのために必要なのは多文化主義的観点と寛容の態度である。互いの文化の小さな共通点も探し育て、差異点はお互いに尊重するべきだと思うのである。



ゆん・きょんちよる

プロフィール

略歴：1945年韓国生まれ。1975年台湾国立政治大学東亜研究所修士課程修了。1975年韓国外務省事務官。1980年京都大学大学院修士課程修了。1983年京都大学法学部助手。1987年京都大学大学院博士課程修了。法学博士（京都大学）。1987年韓国精神文化研究院付属大学院助教授。1991年同大学院副教授。1991年ニューヨーク州立大学客員教授。1994年鈴鹿国際大学国際部教授。2001年大阪大学大学院法学研究科教授。
専攻、国際政治。主要著書『分断後の韓国政治』（木鐸社）

新しいパラダイムから見た救急医療と救急医学

大学院医学系研究科教授 杉 本 壽

大阪大学医学部附属病院特殊救急部は、昭和42年に日本ではじめての本格的な救急医療専門施設として開設された。爾来40年間の教室の歩みは、正に日本の救急医学・医療の歴史そのものである。当時の医療界は経験的医療がなお強く支配していたが、重症救急患者を救命するためには単なる経験ではなく、病態を解明しそれぞれの病態に応じた治療法を選択しなければならないとの信念のもとに、種々の心肺危機にある患者のデータの収集と分析が開始された。これは正に科学的アプローチそのものであり、旧来の経験的アプローチとは本質的に異なる。特殊救急部が追求めた critical care の概念“治す”は、ヒポクラテスの自然治癒の概念“治る”に真っ向から立ち向かうものである。この時から、それまでは単なる実務であった救急医療は救急医学へと昇華し、極めてオリジナリティーの高い診断法や治療法が次々と生み出された。それまではなす術もなかった重症救急患者も今では確実に救命できるようになった。しかし、現在の重装備医療は、技術論的には典型的な途上技術にしか過ぎない。純粋技術を開発するためには、病態をより詳細に解明することが必要である。分子生物学や遺伝子学、免疫学をはじめとする生命科学が爆発的に発展しつつある今こそ、絶好のチャンスである。



すぎもと・ひさし

プロフィール

略歴：1973年大阪大学医学部卒業、1984年同大学院医学系研究科博士課程修了、医学博士。1973年大阪大学医学部附属病院第2外科医員、1974年東光商船株式会社船医、1974年聖隷三方原病院外科、1977年大阪大学医学部附属病院特殊救急部、1984年米国ワシントン大学医学部外科研究員、1986年大阪大学医学部救急医学講座講師、1993年孝仁会澤田病院副院長、1996年大阪大学医学部救急医学講座教授、2001年同附属病院高度救命救急センター長。大阪府医師会副会長、2009年2月日本救急医学会代表理事就任

決断の外科学

大学院医学系研究科教授 門 田 守 人

学生時代より、外科医として肝移植を専門とすることを決断していた。当時は、本邦初の「心臓移植（和田移植）」不調の影響で移植医療に対する逆風が強かったが、「移植チーム作り」に加え、「免疫寛容導入」や「異種移植免疫の応用」などの基礎研究に早くから取り組んだ。また、「医師は率先して「臓器提供意志カード」を所持すべき」などの提言も行ってきた。さらに、「肝移植では生体は亜流、脳死こそ本道」という“筋”を最重要視し、1997年の脳死法案成立をもって生体肝移植を開始し、2004年に第1例目の脳死肝移植をおこなった（現在までに脳死9例、生体129例を施行している）。



また、消化器癌治療に対しても積極的に取り組んできた。「術後再発は病理学的に検出し得ない癌細胞の存在による」という仮説に基づき、遺伝子検査や免疫染色に基づく微小転移診断の研究に取り組み、網羅的遺伝子解析による再発予測の可能性をも示してきた。その点から、これからの癌治療は、経験則に基づく“過去”の癌治療から、臨床試験に基づく“現在”の癌治療、さらには癌の個性診断による個々の癌治療の確立をめざす“未来”の癌治療へと進化していくと考えている。

次に、外科治療は侵襲と不確実性を伴う医療であり、特に手術においては、術中死亡や合併症死亡などがあることを実感してきた。この医療現場における生と死の中で、「患者さんの中の人間」をみだし、「患者さんと医師の互いに歩み寄る姿勢（医療における漸進線理論）」がきわめて重要であると考えてきた。そしてこの視点からの医療・医学教育を重要視し、いち早く「医療事故の開示」にふみきり、さらには患者さんの視点から医療を見つめ直すことを目的とした「早期医療体験実習（Early-Exposure）」を開始した。

最後に、医の倫理と哲学についてであるが、かつて恩師陣内先生の「真に不治の患者を救命せんとして、確信ある研究結果に基づいてなされた行為であれば、かりに法に裁かれることがあろうとも、自己への非難を恐れて何もし得なかったものよりは上位である」との言葉を胸に秘め、イギリスに渡り Calne 教授（ケンブリッジ大学）の下で肝硬変の教室員に対して肝移植を施行し、また検察より告訴されながらも心停止下の肝移植に踏み切ったことを思い出す。そのためには、外科医には何よりも決断力（難しい判断を素早く下しそれに基づいて行動できる能力）が必須である。これからの外科を支える若い先生方や学生諸君に対し、再度陣内先生の「人生は学ばなければ生まれなかったことと同じ、学んで道を知らなければ学ばなかったことと同じ、知って行うことができなければ知らないことと同じである」という言葉を引用し、本稿を締めくくりたいと思う。

もんでん・もりと

プロフィール

略歴：1970年大阪大学医学部卒業、1979年大阪大学医学部助手、1987年同講師、1990年同助教授を経て1994年11月同教授。2007年8月より国立大学法人大阪大学理事・副学長。現在、日本医学会幹事（臨床部会運営委員長）、日本癌治療学会理事長、日本肝移植研究会会長、日本癌学会学術総会会長（2010）、日本肝癌研究会常任幹事など。これまで、日本肝癌研究会会長（2008）、日本外科学会会長（2007）、日本外科代謝栄養学会会長（2005）、日本がん転移学会会長（2005）、日本消化器癌発生学会会長（2002）、日本臓器保存生物学会会長（1999）を歴任。その他では、厚生労働省がん対策推進協議会委員、がん対策情報センター評議会委員、文部科学省がんプロフェッショナル養成プラン選定委員、社団法人日本専門医制評価・認定機構 理事、社団法人日本がん治療認定医機構 副理事長など。

夏目漱石と乃木希典

大学院言語文化研究科教授 尾 上 新太郎

漱石の『心』の主題（テーマ）は、近代的自我の自閉性とされる。では、これに対する漱石の解答はどうなっているか。

主人公は、若き日、我の罪を犯した。同じ下宿先のお嬢さんに、親友・Kが、自分同様、恋心を抱いていることを知り、彼を、策略を巡らして、彼女から遠ざけようとしたのである。結果、Kは自殺した。以後、主人公は、暗い人間になっていく。いざとなると、人間、心変わりをする、エゴイスティックになる。こういう人間観を、彼は、もち続ける。

明治天皇の葬式の日、乃木希典夫妻が殉死する。こういう乃木の行動に対して、漱石は、評論「模倣と独立」中、至誠と評している。前年の1911年、西田幾多郎は、『善の研究』を出版している。西田によれば、至誠とは、自己の内奥において、宇宙の真理一神と言ってもいいと合一化し、そこから意志を起こし、行動することである。漱石の至誠も、この西田の至誠を伺わせるところがある。乃木の殉死について、自己の存在証明のかかった忠義だった、という説がある。換言すれば、乃木の殉死は、乃木自身の精神的主体的生の問題がかかっていたということである。『心』の主人公は、結局、自殺を思い立つが、これは、乃木の殉死の影響によるものであり、そこには、積極的な精神的生の問題が意識されていたのではないと思われる。



おがみ・しんたろう

プロフィール

略歴：1943年9月、大阪市生まれ。1974年3月、京大大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。2008年9月、大阪大学より、博士号（言語文化学）を授与された。1974年4月、仏教大学専任講師。1979年4月、大阪外国語大学外国語学部助教授。1990年1月、同教授。2007年10月、大阪大学と大阪外国語大学との統合により、大阪大学大学院言語文化研究科教授。
学生時代は、主に和歌に関する研究を行った。木下長嘯子他。同時に、日本近代文学、就中、漱石、小林秀雄の研究を行った。いずれ、私は、自己の原理はいかに取るべきかという問題の解明の一環として、これらの研究を行ったのである。教師になってからは、主に小林に関する研究を行った。2006年3月、『戦時下の小林秀雄に関する研究』（和泉書院）を出版した。ある時期から、小林の国家観に興味を持つようになった。同時に、個人観に。前者は、私を、田辺元の「種の論理」の批判的研究に向わせた。後者は、私を、親鸞の研究に向わせた。
目下、一番興味を抱いているのは、日本人の死観である。古代から現代にかけて、それがどう変化したかを研究している。

ビルマ語研究と言語学

大学院言語文化研究科教授 藪 司 郎

言語学は経験科学である。さまざまな言語の多様な言語事実を知る一方、ひとつの言語のさまざまな言語事実に通暁することによって、言語一般の問題の闡明に寄与することを目指す。40年近く三つの大学においてビルマ語とチベット＝ビルマ系諸言語の教育と研究に携わってきた過程で得た知見を踏まえて、ビルマ語研究のいくつかの問題を考えてみたい。

言語の文法記述の枠組みの基本にあるものは、A. マルチネのいう第一次分節の単位をどう分類するか、すなわち品詞分類の問題であろう。ビルマ語は、多くのチベット＝ビルマ語同様、名詞類・動詞類・助詞類の3つの大きな語類（品詞）からなる。一方、語の下レベルの単位（音韻）に、摩擦音s（＜破擦音c）にも無気／有気の区別があること、稀有な歯間破裂音T（＜s）があることなど、音声学的知見や言語変化の通則から異例といえる言語事実も認められる。文法では、動詞文標識助詞の-piは完了相を示す一方、活写法という叙法を示す機能も備えているとみなすことができる。さまざまな言語現象には、言語がもつ体系性に収まりきらない部分 - これを剰余r市iduという（泉井久之助） - があることの証左であろう。



やぶ・しろ

プロフィール

略歴：1943年5月滋賀県甲賀（こうか）市生まれ。1967年3月大阪外国語大学卒業、1969年3月京都大学大学院文学研究科修士課程（言語学専攻）修了、同年4月同博士課程進級、8月退学。1969年9月東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手、1982年4月配置換え大阪外国語大学助教授、1990年1月同教授を経て、2007年10月大学統合に伴い大阪大学教授（大学院言語文化研究科）。その間、1970 - 72年ヤンゴン外国語学院講師（日本語）、1994 - 95年文部省在外研究員（米加州大バークレー校、英ロンドン大SOAS）のほか、数次に互りビルマ・インドで言語調査。専攻：言語学・チベット＝ビルマ語学。担当授業：ビルマ語学、東南アジア言語概論、チベット＝ビルマ諸語研究、ビルマ語系諸語特別研究、アジア・アフリカ言語構造論特別研究、ほか。所属学会：日本言語学会（委員）、東南アジア学会、日本西蔵学会ほか。

数学は笑う

大学院情報科学研究科教授 川 中 宣 明

私は「面白い」(interestingではなく、funnyな)ものが好きである。大学院での指導教官であった吉澤尚明先生からは大事なことを2つ教えて戴いた。ひとつは「数学は誰かに教わるものではない。自分でやるものだ。」(実際、先生は何も教えようとはなさなかった)で、もうひとつは「Gelfand はエライ！」(I.M.Gelfandのことを常に言っておられた)である。1962年のStockholm国際数学者会議でのGelfandの講演に大きな間違いがあり、偉大な数学者の失敗として一部で有名になった。その14年後のある日、ふとしたことから私は「Gelfandが、折角、ボケてみせたのに誰もツッコまなかった」ことに気付いた。Gelfandの1962年のアイデアの方向そのものは正しかったことを明らかにする論文を書いたのは、さらに10年後だったので、結局、最初のボケから25年ぶりにツッコんだことになる。ツッコみだけでなく、ボケもやりたいと思っていた矢先、情報科学研究科の発足という話が持ち上がり、「面白いものに会えるかも」と参加を決意した。情報科学の本を読んでいると、自分が昔、妄想したこと似た構図が見えてきたので、それを元に“Plain Algorithm”の理論というものを考えた。自分としてはボケた積みもりである。幸い、私の学生たちがツッコミを担当してくれて、次第に理論の形が整ってきている。



かわなか・のりあき

プロフィール

略歴：昭和43年3月に京都大学理学部を卒業し、昭和45年3月に京都大学大学院理学研究科修士課程数学専攻を修了した。当時は大学紛争の最中で、私が修士論文を書いている部屋の窓の外では対立する二派の間で激しい投石が繰り返されていた。昭和45年4月、幸運にも大阪大学理学部助手(解析学)に採用された。昭和50年6月に理学博士の学位を受けたが、学位論文の内容は解析学というよりも代数学に属するものであった。昭和50年10月に講師になり、このとき解析学から代数学の講座に移った。昭和56年4月に助教授、平成元年4月に教授に昇任し、代数学第一講座を担当した。平成8年4月の大学院重点化で大学院理学研究科数学専攻(代数学講座)に配置換えとなった。平成14年4月に情報科学研究科情報基礎数学専攻(離散構造学講座)に移った。39年間の大阪大学在籍中に、公的に2度、専門を変えたことになる。

45年目の卒業 — 阪大数学 —

大学院情報科学研究科教授 坂 根 由 昌

大阪大学で数学を学び始めて以来、45年間を理学部数学教室と共に歩んで来た。私自身が強く影響を受けた先生との出会いを通して、微分幾何学の研究をどのように展開してきたかを論じた。学部・修士時代には、村上信吾教授の指導の下で、半単純リー群の等質空間に関するKostant教授の論文を学び、これが生涯を通しての研究の基礎になったこと。その後留学した米国ノートルダム大学大学院時代には、松島与三教授の下で、コンパクト複素可解多様体のDolbeaultコホモロジー群を研究したこと。また帰国後は、複素射影空間のコンパクトケーラーアインシュタイン部分多様体の研究を出発点として、射影束の正則変換群の構造研究を行っていたが、Calabi予想の解決や二木不変量に刺激されて、第一Chern類が正である非等質なコンパクトケーラーアインシュタイン多様体の構成に初めて成功したこと。これらの研究成果をそれぞれのエピソードを織りまぜながら述べた。さらに、最近も研究を続行している等質多様体上の等質アインシュタイン計量の存在・非存在問題について、その発展の歴史や現在の進行状況を論じた。45年目に阪大数学を卒業するにあたり、数学の研究には、自らが興味を抱くことのみならず研究に専念できる環境に居ることが重要であることを再確認した。



さかね・ゆうすけ

プロフィール

略歴：昭和43年大阪大学理学部数学科を卒業。昭和45年同大学院理学研究科数学専攻修士課程を修了。昭和49年米国ノートルダム大学大学院数学専攻博士課程を修了、同年8月にPh.Dの学位。同年大阪大学理学部数学科助手。昭和53年同講師、昭和56年同助教授、平成6年同教授、平成14年同大学大学院情報科学研究科の発足にともない配置換え、情報基礎数学専攻離散幾何学講座を担当、平成21年3月退職。平成21年4月から大学院情報科学研究科特任教授。専門分野は微分幾何学、主に、アインシュタイン多様体の研究。

放射線化学から量子ビーム科学へ

産業科学研究所教授 田 川 精 一

原子力工学科に進学した頃、原子力発電はまだ始まったばかりで、原子力は無限の可能性を秘め、人気もあり新鮮で、放射線は物質構造、素粒子・核物理の強力な研究手段として多くのノーベル賞受賞者を輩出していた。一方、国民生活に密接な医学や材料分野、特に高分子の放射線利用は非常に広がっていたが、応用と基礎のギャップが大きく、このギャップを埋めると無限の可能性が開けると思い、放射線化学を選んだ。ギャップを埋めるために高分子や有機物への放射線照射効果の基礎を明確にすることが重要だと思い、放射線と通常の光化学反応との違い、放射線の間でも γ 線、X線、イオン、放射光、中性子、陽電子等の照射効果における線質・線源の違いを共同研究者と一つ一つ調べ論文を書いていった。一方、物理過程から通常の化学反応が始まるまでのブラックスボックスを解明しないとギャップを埋めることはできないことも明確だったので、 μ 秒・ナノ秒、ピコ秒パルスラジオリシスの開発と放射線化学初期過程の研究を行ってきた。20年ほど前から量子ビームテクノロジーの重要性を提唱し、多くの方々と協力して活動してきたが、最近、重要性が認識されてきたので今後の更なる発展を期待している。我々も最近、量子ビームテクノロジーとしてかつてない規模の電離放射線による工業生産が見込まれ、半導体製造分野だけでなく社会全体への寄与も非常に大きい、次世代リソグラフィの露光源に極端紫外光を用いたプロセスと材料の研究で基礎と応用のギャップをうまく埋めることができ、世界をリードする研究を多くの協力者と共に進めている。



たがわ・せいいち

プロフィール

略歴：昭和44年東京大学工学部卒業、昭和46年東京大学工学研究科博士課程中退、東京大学工学部助手、東京大学原子力総合センター助教授を経て、平成5年大阪大学産業科学研究所教授、平成21年4月～大阪大学産業科学研究所特任教授。日本放射線化学会会長、日本学術会議原子力基礎研究専門委員会委員長、日本原子力学会理事、日本アイソトープ協会理事、ケイ素化学協会理事、日本加速器学会評議員、文部科学省・科学技術・学術審議会専門委員、量子ビーム研究開発作業部会委員、内閣府原子力試験研究評価委員会専門委員、日本原子力研究所研究評価委員、日本原子力研究開発機構量子ビーム応用研究・評価委員会委員長、東京大学原子力工学研究施設運営委員、京都大学原子炉実験所運営委員等として学界・学術の振興に貢献。日本放射線学会賞、日本原子力学会賞（貢献賞）等の受賞、日本原子力学会フェロー。

阪大での45年間を振り返って ― 研究と人と ―

接合科学研究所教授 野 城 清

3月12日（木）午後3時より、医学部銀杏会館阪急・三和ホールにて、学内外から200名を超える方々にお集まり頂き、野城 清教授の最終講義「阪大での45年間を振り返って - 研究と人と - 」が執り行われました。

ご講義ではご自身の業績、高校時代からのお知り合い、友人との現在に至るまでの繋がり、学生時代のご親友、助手時代の恩師、トロント時代および助教授時代の出会いについて紹介された。人の生き方には、1. 不言実行型、2. 有言実行型、3. 不言不実行型、4. 有言不実行型の4つのパターンがあり、野城先生ご自身は、有言実行型を貫かれたとのこと。論文に関しては、200報を超えたが、濡れ・物性が1/3、溶接・接合が1/3、粉体技術・薄膜が1/3とバラエティに富んだ内容の研究が行われたことが紹介されました。特に、2000年に主催した倉敷のおけるHigh Temperature Capillarity（高温毛細管現象）に関する国際会議に関する深い思い出が紹介されました。

最後に、応援団によって野城先生に対してエールが送られ、肅々とした雰囲気の中に講義が終了しました。



のぎ・きよし

プロフィール

略歴：野城 清教授は、昭和43年3月大阪大学工学部冶金学科を卒業、昭和48年3月大阪大学工学研究科（博士課程）冶金学専攻を単位取得退学後、大阪大学工学部助手に採用され、平成2年2月同助教授、平成3年4月大阪大学溶接工学研究所助教授を経て、平成7年6月同教授に昇任し、平成8年5月大阪大学接合科学研究所教授として、機能性診断学分野を担当されました。その後、平成12年4月大阪大学評議員、平成16年4月には接合科学研究所所長となり、法人化後の接合科学研究所の発展に多大なる貢献を行い、平成21年3月31日限り定年退職されました。学内においては、評議員、学生生活委員会委員長を務めるなど多くの委員を歴任し、本学の管理・運営と発展に貢献して来られました。一方、学外においては、わが国で最初に一部上場企業の研究開発型役員兼業として平成13年から取締役を務められました。国・自治体・公益法人等に対して、日本学術会議連携会員、全国材料系教室協議会会長の他、各種理事、評議員に就いて来られました。

抽象と写実の科学 — プラズマ物理からレーザー核融合まで —

レーザーエネルギー学研究センター教授 三 間 窓 興

理論物理学者を志して研究者への道を歩み始めてから、京大、広島大の理学部を経て、大阪大学のレーザーエネルギー学研究センターにおいて34年間に過ごさせていただいた。この間、私は、国内、国外で多くの恩師、先輩、同僚、後輩に巡り会い、多くの知恵を授かりながら理学と工学との間を試行錯誤して今日に至った。ご承知の通り、理論物理学は様々な物理現象からその支配する法則を抽出する学術である。いわば、抽象の科学である。一方、プラズマのシミュレーションや核融合実験研究は、現象の再現や、予測を実証し観察するものである。すなわち、写実の科学である。プラズマ核融合研究は半世紀に及ぶ超長期の研究開発であり、写実と抽象を行き来しながらそのゴールに迫ろうとしている。プラズマ核融合における理論研究の指導原理

として、私は、名古屋大学の谷内俊弥先生が講演で漏らされた近松門左衛門の芸術論「虚実皮膜」に共鳴している。すなわち、理論モデルは現象を再現するものではないがその本質を鋭く抽出するものであると考えている。

最後に、私の試行錯誤を受け入れていただき、30余年に渡り活動の場を提供していただいた大阪大学、特にレーザーエネルギー学研究センターに感謝したい。



みま・くにおき

プロフィール

略歴：昭和43年3月京都大学理学部卒業、昭和48年3月京都大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学、同年5月理学博士、広島大学理学部助手、大阪大学工学部助手、ベルテレホン研究所及びUCLA客員研究員、大阪大学レーザー核融合研究センター（現レーザーエネルギー学研究センター）助教授を経て、昭和59年5月大阪レーザー核融合研究センター教授に昇任。平成7年高速点火レーザー核融合研究に着手。平成7年4月～平成11年3月、平成17年4月～平成21年3月の間センター長を務める。米国物理学会プラズマ物理学賞、大阪科学賞、エドワード・テラー賞等を受賞。

春の褒章と叙勲

平成 21 年度の春の褒章及び叙勲受章者が発表され、本学関係の受章者は次の方々です。

中 嶋 英 雄（産 業 科 学 研 究 所 教 授）	紫 綬 褒 章
柴 田 弘 文（名 誉 教 授）	瑞宝中綬章
高 田 敏（名 誉 教 授）	瑞宝中綬章
田 川 邦 夫（名 誉 教 授）	瑞宝中綬章
田 中 武 彦（名 誉 教 授）	瑞宝中綬章
小 水 満（元医学部附属病院医療技術部長）	瑞宝双光章
吉 田 博 次（元医学部附属病院事務部長）	瑞宝双光章
中 尾 由紀子（元医学部附属病院副看護部長）	瑞宝単光章

（総務部人事課）

岸本忠三 元総長、平野俊夫医学系研究科長「クラフォード賞」受賞

生命機能研究科の岸本忠三寄附講座教授（元大阪大学総長）、平野俊夫医学系研究科長・医学部長（生命機能研究科・医学系研究科・免疫フロンティア研究センター教授）が、日本人として初めてクラフォード賞を受賞されました。

“インターロイキンの発見、それらの特性決定と炎症性疾患における役割の探求”という基礎的研究が関節リウマチなどの炎症性疾患に対する画期的な治療薬開発への道を開いた事が評価されての受賞で、アメリカコロラド大学デナレロ教授との共同受賞です。

クラフォード賞は、人工腎臓を発明したホルガー・クラフォードとその妻によって創設されたクラフォード財団がスポンサーとなり、ノーベル賞選考機関のスウェーデン王立科学アカデミーが1982年より毎年、世界的に優れた業績を1件ずつ表彰している賞です。天文学・数学、地球科学、生物学の3分野から毎年1分野ずつ順番に選ばれますが、関節炎分野のみは、画期的な研究成果があった年のみ表彰されることになっており、2009年度は関節炎分野からの選出になりました。

授賞式を含めた一連の行事はクラフォードディとして、5月11日(月)から13日(水)までの3日間、スウェーデンのストックホルムとクラフォード財団発祥の地ルンドで開催されました。王立科学アカデミーでの授賞式、各受賞者の記念講演、国王・王妃ご臨席の晩餐会等が開催された他、カロリンスカ研究所ノーベル講堂での学術講演会、ルンド大学における一般向け講義等多くの催し開催され、スウェーデン国王、王妃ご臨席のもと開催された授賞式では、カール16世グスタフ国王から直々に受賞者にメダルと賞状が手渡されました。



岸本元総長



平野研究科長



（医学系研究科・医学部、生命機能研究科）

田中信和君「Dysphagia Research Society(DRS)17th Annual Meeting 1st Place Scientific Abstract」受賞

歯学研究科高次脳口腔機能学講座顎口腔機能治療学教室の研究生田中信和君が米国 New Orleans で行われた Dysphagia Research Society (DRS) 17th Annual Meeting において最も優れた Poster Presentation を行った者に対して授与される 1st Place Scientific Abstract を受賞しました。

DRS は、摂食・嚥下機能やその障害に関する唯一の国際学会であり、1992 年に Wisconsin で第 1 回が開催されました。以来、北米を中心に毎年開催されており、本学会の Official Journal “Dysphagia” は摂食・嚥下の専門学術誌として、関連分野から多くの文献が引用されています。

今回受賞した研究のタイトルは「Swallowing frequency in elderly people during daily life」です。これは、日常生活での嚥下頻度を測定するデバイスを開発し、そのデバイスを用いて、高齢者の日常生活での嚥下頻度が若年者と比べて低いことを明らかにした報告です。今回の発表では、広く応用が期待されるデバイスを開発したこと、高齢者の新しい嚥下リハビリテーション法作成につながる可能性があるという内容が高く評価されました。

本賞は、3月7日(土)、Westin Canal Place での Poster Plenary Session での発表後に選考され、賞状を授与されました。

(歯学研究科・歯学部)



藤田 裕准教授「日本天文学会欧文研究報告論文賞」受賞

理学研究科の藤田 裕准教授が、2008 年度の「日本天文学会欧文研究報告論文賞」を受賞しました。本賞は、日本天文学会が発行する学術雑誌「Publications of the Astronomical Society of Japan」に過去 5 年間に掲載された論文の中で、国内外で高い評価を受けた論文の著者に贈られるものです。

今回受賞の対象となった論文で藤田准教授は、宇宙に広く存在する銀河が、時間とともにどのように進化するのかを理論的に調べ、その原因のひとつが、銀河団の集団である銀河団の周辺環境にあることを明らかにしました。

授賞式は、大阪府立大学で開催された日本天文学会春季年会中の 3 月 25 日(水)に、春季総会会場で行われました。



(理学研究科・理学部)

安達清治氏「日本化学 技術有功賞」受賞

3月28日(土)日本大学船橋キャンパスで開催された日本化学会第89回春季年会で、理学研究科分析機器測定室技術補佐員の安達清治氏(前理学研究科技術部技術専門職員)が日本化学会平成20年度化学技術有功賞を受賞しました。

日本化学会化学技術有功賞は、化学及び化学技術に関連する業務にあたり装置・器具の開発・改良、特殊技能などにより特に貢献のあった者に授与されるものです。安達氏は一貫して溶液系NMR装置を担当し、通常は観測困難なNMR信号を検出するための測定法開発などに顕著な成果を挙げてきました。また、NMR測定方法や安全上の注意事項に関する実習に積極的に関与し、大学院における教育研究にも大きく貢献をしました。以下に安達氏の数多い成果・貢献の中から代表的な例を紹介します。

1. 常磁性金属錯体のNMR観測

鉄・コバルト等の常磁性金属イオンが配位した錯体は、化学諸分野で活発に研究されていますが、NMRによる構造情報の取得が極めて困難になり、研究上の大きな障害となっています。安達氏は独自の測定法改良によって観測領域を広げることに成功しました。

2. NMRによる非芳香族6員環状構造化合物の構造異性体の同定法

六員環構造を有する天然有機化合物には糖質など、生物学的に重要なものが多いのですが、糖質の場合にはシグナル重複のため、有効な構造情報の抽出が困難でした。安達氏は共同研究において ^{13}C - ^1H スピン結合定数に注目し、組み合わせパターンによって六員環化合物の立体配置を決定する実用的手法を開発しました。

右：安達氏

(理学研究科・理学部)

大阪大学共通教育賞表彰式挙行

大学教育実践センターでは、5月21日(木)に平成20年度第2学期大阪大学共通教育賞表彰式を行いました。

この大阪大学共通教育賞は、全学共通教育の授業を担当する本学教員及び非常勤講師を対象として、優れた授業を実践した教員、優れた教科書等を著した教員、優れた著述を行った教員、並びに全学共通教育の実施運営に顕著な功労のあった教員を表彰することによって、共通教育の質的向上を図ることを目的に平成14年度に制定されたもので、今回が14回目の表彰となりました。

また、同一カテゴリーで5回目の受賞は、大阪大学共通教育賞特別賞として表彰いたしました。

この顕彰制度が教育評価の先駆的な試みとして、本学の教育の発展に寄与できることを願うものです。

大阪大学共通教育賞の選考は、全学の教員及び学生を対象に行ったアンケート結果に基づき、選考委員会において、教育上の多大な努力や優秀な教育技術等を総合的に評価した結果、12名の教員が選出されました。

表彰式では、鷲田清一総長から表彰状と記念品の授与が行われ、小泉潤二理事・副学長、工藤眞由美大学教育実践センター長、眞鍋昭治郎副センター長、小田雅博事務長も列席し、受賞者を祝福しました。

(大学教育実践センター)



「平成21年度文部科学大臣表彰」受賞

平成21年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞の発表があり、表彰式が4月14日(火)に虎ノ門パストラルで行われました。本賞は、科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた者について、その功績を讃え意欲向上を図り、科学技術水準の向上に寄与することを目的に定められたものです。

医学系研究科外科学講座心臓血管外科学の澤 芳樹教授が、科学技術賞（研究部門）を受賞しました。

対象となったのは「細胞シート工学技術の開発とその臨床応用に関する研究」です。澤 芳樹教授は、長年心筋の再生治療に関する研究取り組み、今回は細胞シート工学を応用した自己骨格筋筋芽細胞シート移植の臨床応用の成果に対して授与されました。実際に、自己骨格筋筋芽細胞シートを移植した拡張型心筋症の患者は、3ヶ月を経て心機能が大幅に改善し、現在も自宅で日常生活を不自由なくおこなっています。



澤教授（左から2人目）

今回の受賞は、「細胞シート工学」という概念を提唱し、その基盤技術となる「温度応答性培養皿」を開発した、東京女子医科大学 先端生命医科学研究所 岡野光夫教授、大和雅之教授、清水達也准教授と、細胞シート工学を角膜の再生治療に臨床応用した東北大学 西田幸二教授（前大阪大学医学系研究科感覚器外科学（眼科学）助教授）との共同受賞であり、医学と工学が連携することで成し得た成果であります。

（医学系研究科・医学部）

工学研究科の森田清三教授、杉本宜昭特任講師、阿部真之准教授と Oscar Custance 元客員助教授（現 NIMS グループ リーダー）が、日本物理学会の推薦により科学技術賞（研究部門）を受賞しました。今回の受賞は、Nature Materials（2005）、Nature（2007）、Science（2008a&b）などに掲載された原子間力顕微鏡により個々の原子を見て、識別し、原子操作して、多元素からなる複雑なナノ構造体を室温で組み立てる「室温原子間力顕微鏡による多元素系ナノ構造体操作組立の研究」の業績が評価されたものです。



（工学研究科・工学部）



微生物病研究所長の菊谷 仁教授が科学技術賞（研究部門）を、武田直和特任教授（常勤）が科学技術賞（開発部門）を受賞しました。

菊谷教授は「セマフォリン分子群による免疫制御機構の研究」の業績が評価され、武田教授は「組換えウイルス粒子を用いた診断薬の開発」の業績が評価されました。研究進展に大きく寄与するとともに、治療法の開発への応用が期待されています。

（微生物病研究所）

接合科学研究所の小溝裕一教授が科学技術賞（研究部門）を受賞しました。受賞理由は、「不均質核生成による溶接メタラジの研究」で、溶接の凝固まで使用される溶接金属において、組織形成過程をその場観察する技術を確立し、適正な介在物を積極的に利用した微細アシキュラーフェライト生成の金属学を解明したことです。本研究に関わる53件の論文と26件の特許ならびに大径管溶接鋼管に使用されている実績が評価された結果、溶接学会としては初の受賞となりました。

（接合科学研究所）



基礎工学研究科の小芦雅斗准教授と佐藤和則特任准教授が、若手科学者賞を受賞しました。小芦准教授は「半導体スピントロニクスのマテリアルデザインの研究」の業績が評価されたもので、半導体スピントロニクス材料の一つである希薄磁性半導体の強磁性の起源を解明し、第一原理計算によるキュリー温度の高精度計算法を開発して新材料の設計に応用した点が評価されました。また、佐藤特任准教授は「量子暗号通信のセキュリティ理論と量子情報の基礎理論の研究」の業績が評価されたもので、実際の暗号装置のセキュリティという応用的な側面と、量子力学の基本的性質を定量的に明らかにするという基礎的な側面の両方に寄与するものであったことが評価されました。



(基礎工学研究科・基礎工学部)

緑のデザイン賞「緑化大賞」受賞

豊中キャンパス東口環境整備計画が第19回「緑化大賞」を受賞しました。この賞は、財団法人都市緑化基金と第一生命保険相互会社の共催により、緑豊かな都市環境の形成を図るとともに、その中で育まれる人と自然とのふれあいやコミュニティの醸成などに役立つことを目的に、全国から新たに提案される緑化プランを公募し、優れたプランを表彰するとともに緑化実現のための資金助成を行うものです。

豊中キャンパス東口環境整備はキャンパスマスタープランの発展形として豊中キャンパス東口のバリアフリー化、傾斜地の公園化などを目的に、キャンパスデザイン室・施設部により計画が進められ、道路との高低差約6mのスロープ化、および豊中市側斜面の公園的整備を実施しました。



緑化の考え方として、今あるサクラとモミジの景観を活かすこととし、「ヤブラン」をはじめとする気候風土に合った宿根草・地被類を列状に植えることで、「新しい里山の景」として表現することをねらったものであり、大学関係者・地域住民に安全に楽しく散策できる森を創出するとともに、まちの美しい緑景観を形成する点が高く評価され、本受賞に結びつきました。

表彰式は年5月25日(月)、帝国ホテルで行われ、賞状と副賞(緑化助成金)が授与されました。

今後は維持管理において大学・近隣住民団体との連携強化の中で、コミュニティガーデンとし醸成を図っていくことが大切となります。



(財)都市緑化基金百武理事長より表彰状を授与される
キャンパスデザイン室吉岡聡司助教



緑化完成

(キャンパスデザイン室、施設部)

新教授紹介

大野木 哲 也 (おおのぎ てつや)

大学院理学研究科



所 属：大学院理学研究科物理学専攻基礎物理学講座
専門分野：素粒子論

【略歴】

- 昭59. 3 東京大学物理学科卒業
- 61. 3 東京大学大学院理学系研究科博士課程前期修了
- 61. 3 理学修士（東京大学）
- 平元. 3 東京大学大学院理学系研究科博士課程後期修了
- 元. 3 理学博士（東京大学）
- 元. 4 日本学術振興会(高エネルギー物理学研究所)特別研究員
- 2. 5 広島大学助手理学部
- 12. 4 広島大学助手大学院理学研究科
- 13. 4 京都大学助教授基礎物理学研究所
- 19. 4 京都大学准教授基礎物理学研究所
- 21. 6 大阪大学教授大学院理学研究科

大 村 悦 二 (おおむら えつじ)

大学院工学研究科



所 属：大学院工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻テクノロジーデザイン講座
専門分野：知的加工、加工数理、レーザー加工

【略歴】

- 昭51. 3 大阪大学工学部精密工学科卒業
- 53. 3 大阪大学大学院工学研究科博士前期課程修了
- 56. 3 大阪大学大学院工学研究科博士後期課程単位取得退学
- 56. 4 大阪大学助手工学部
- 59. 3 工学博士（大阪大学）
- 59. 4 大阪大学助手溶接工学研究所
- 平 3. 4 茨城大学助教授工学部
- 8. 4 大阪大学助教授工学部
- 10. 4 大阪大学助教授大学院工学研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院工学研究科
- 21. 6 大阪大学教授大学院工学研究科

渡 邊 肇 (わたなべ はじめ)

大学院工学研究科



所 属：大学院工学研究科生命先端工学専攻生物工学講座
専門分野：分子生物学、環境生物学

【略歴】

- 昭60. 3 東京大学理学部生物化学科卒業
- 62. 3 東京大学大学院理学系研究科修士課程修了
- 平元. 4 日本学術振興会特別研究員
- 2. 3 東京大学大学院理学系研究科博士課程修了
- 2. 3 博士（理学）（東京大学）
- 3. 4 東京工業大学助手生命理工学部
- 11. 4 東京工業大学助手大学院生命理工学研究科
- 12. 3 岡崎国立共同研究機構助教授基礎生物学研究所生命環境科学研究センター
- 12. 4 岡崎国立共同研究機構助教授統合バイオサイエンスセンター
- 16. 4 自然科学研究機構助教授岡崎統合バイオサイエンスセンター
- 16. 4 総合研究大学院大学担当助教授
- 19. 4 総合研究大学院大学担当准教授
- 21. 6 大阪大学教授大学院工学研究科

新教授紹介

片 山 泰 一 （かたやま たいいち）

大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科



所 属：大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科小児発達学専攻 こころの発達神経科学講座
専門分野：神経化学

【略歴】

- 昭63. 3 京都薬科大学薬学部製薬化学学科卒業
- 平 2. 3 京都薬科大学大学院博士前期課程修了
- 2. 4 田辺製薬株式会社安全性研究所（現薬理研究所）研究員
- 8. 4 大阪大学医学部研究生（解剖学第二教室）（平12.3まで）
- 10. 4 田辺製薬株式会社創薬研究所研究員
- 12. 6 博士（医学）（大阪大学）
- 13. 2 大阪大学助手大学院医学系研究科
- 15.11 トロント大学医学部神経変性疾患センター博士研究員
- 17. 4 浜松医科大学助教授医学部解剖学講座
- 21. 4 大阪大学教授大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科

谷 池 雅 子 （たにいけ まさこ）

大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科



所 属：大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科小児発達学専攻 こころの発達神経科学講座
専門分野：小児神経学・神経科学

【略歴】

- 昭58. 3 大阪大学医学部医学科卒業
- 58. 4 大阪大学医学部（小児科学教室）において研究に従事
- 58. 5 大阪大学医学部附属病院において臨床補助の研修に従事
- 58. 7 医員（研修医）（大阪大学医学部附属病院）
- 59. 6 大阪警察病院小児科医員（昭61.6まで）
- 60. 7 大阪大学医学部研究生（小児科学教室）
- 平元. 7 医員（大阪大学医学部附属病院）
- 4. 5 米国ノースカロライナ大学医学部病理学教室研究員
Postdoctoral Fellow
- 6. 6 大阪大学助手医学部
- 9. 1 医学博士（大阪大学）
- 11. 4 大阪大学助手大学院医学系研究科
- 14. 4 大阪大学講師大学院医学系研究科
- 16.11 大阪大学助教授大学院医学系研究科
- 18. 4 大阪大学特任教授（常勤）大学院医学系研究科附属子どもこころの分子統御機構研究センター
- 21. 4 大阪大学教授大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科

森田善一郎名誉教授(工学部)逝去



本学名誉教授森田善一郎先生は、2月15日(日)にご逝去されました。享年80歳でした。

先生は昭和28年大阪大学工学部冶金学科をご卒業、昭和34年同大学院を修了され、大阪大学より工学博士の学位を授与されておられます。同年関西大学工学部専任講師に採用され、昭和35年には助教授に昇任されました。昭和41年大阪大学工学部助教授に採用され、昭和48年には教授に昇任され、冶金学科 冶金学第二講座(鉄冶金学)を担当されました。昭和50年からは冶金工学科 冶金学第一講座(鉄冶金学)を、また昭和63年からは材料開発工学科 材料物理化学講座、同年講座配置換えにより反応制御工学講座をそれぞれ担当され、平成6年停年退官されました。その間、大阪大学国際交流委員会委員、同学術交流部会長、大阪大学留学生センター設置準備委員会委員、工学部留学生相談室長などの国際交流関係をはじめとする各種委員会委員を歴任され、大阪大学の発展に貢献されました。また、工学部材料開発工学科・材料物性工学科九十年記念事業組織委員長として、「材料開発物性記念館」

の建設にも貢献されました。退官後直ちに、住友金属工業株式会社 常勤顧問に就任され、平成11年同社 総合技術研究所 非常勤技術顧問となられ、平成13年退職されました。

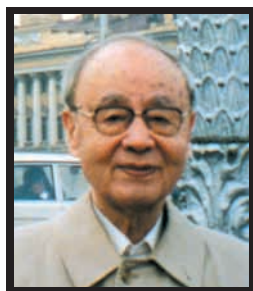
先生は我が国における鉄鋼製精錬工学ならびに冶金物理化学の先駆的、指導的研究者として広く知られ、その研究分野は多岐にわたっておられました(鉄鋼製精錬反応ならびに鋼の凝固に関する熱力学、冶金融体の物性と構造、インジェクション冶金ならびに溶融還元製鉄に関する基礎研究)。これら一連のご業績により、国内では、日本鉄鋼協会より西山記念賞、依論文賞、西山賞、山岡賞、日本金属学会より功績賞、谷川・ハリス賞、さらに、日本学術振興会功労賞、日本混相流学会技術賞を受賞され、平成10年には紫綬褒章、平成15年には勲三等旭日中綬章を受章されました。また、昭和46年より一年余り、英国ウエールズ大学客員教授、平成3年中国北京科技大学より名誉教授の称号授与、平成4年より二年近く英国ノッティンガム大学国際顧問教授ならびに、平成6年同大学よりドクター・オブ・サイエンスの名誉博士号授与、平成10年ルーマニア国クルージュ・ナボカ工科大学よりドクター・オノリス・コーザの名誉博士号授与などの極めて高い国際的評価も受けられました。

学外では、文部省ならびに文部科学省学術審議会専門委員、日本学術会議金属工学研究連絡委員会委員、日本鉄鋼協会会長、理事、日本金属学会理事、全国大学材料系教室協議会副会長、(財)川鉄二十一世紀財団理事などの要職を歴任され、我が国の科学技術ならびに学協会発展に貢献されました。

常に鉄鋼分野を中心とした素材プロセス工学の進歩発展を支えるべく、その教育ならびに基礎研究に全身全霊を捧げてこられた森田善一郎先生のお姿を偲び、ここに謹んで哀悼の意を表しますとともに心よりご冥福をお祈り致します。

(工学研究科・工学部)

山川鴻三名誉教授(文学部)逝去



本学名誉教授山川鴻三先生は、病氣療養中のところ、4月25日(土) 誤嚥性肺炎にて逝去されました。享年91歳でした。

先生は、清国山東省のお生まれで、昭和20年9月京都帝国大学文学部文学科をご卒業になり、三重県立医科大学、京都工芸繊維大学に勤務後、昭和34年4月京都大学助教授を経て、昭和35年4月大阪大学文学部英文学講座に助教授として着任され、昭和49年10月教授となりました。昭和56年4月大阪大学を停年により退官され、大阪大学名誉教授の称号を授与されたのち、同年4月より追手門学院大学教授、昭和61年4月からは佛教大学教授に就任し、平成元年3月に退職されました。

先生は、18世紀以降の英文学をその専門分野とし、特に批評理論の研究および小説と美術の関連の研究において優れた成果をあげられました。批評理論の研究としては、『近代英文学における二つの批評の伝統』(『大阪大学文学部紀要』第15巻、昭和44年)が代表的な諸作であります。この研究は、19世紀初頭以降20世紀前半に至るまでのイギリスの批評を、コールリッジ、ペイター、リードの形作るロマン派的批評の伝統とアーノルドからエリオットへ引き継がれる古典的批評の伝統の二つの流れとしてとらえ、それぞれの特色を精密に論述しながら、二つの伝統の絡み合いの意味を鋭く分析したものです。この研究は、英文学における新しい形の批評史と言える形態を備えており、その点においても学界の注目を集めました。先生は、この研究により、大阪大学から文学博士の学位を授与されました。

先生は、その後、批評理論を実際の作品に適用する批評活動の実践に傾き、その対象を小説と美術の関連という分野に求められました。『思想の冒険—ロレンスの小説』(昭和49年)、『モームの二つの世界』(昭和55年)、『第十詩神—英文学者と美術批評』(昭和61年)、『イギリス小説とヨーロッパ絵画』(昭和62年)、『サロメ—永遠の妖女』(平成1年)、『楽園の文学』(平成7年)、『永遠のロマンチズム』(平成10年)、『ヴェニスと英米文学』(平成16年)などは、その代表作であります。

以上のように、先生は、これらの優れた研究業績をあげられ、また多くの優れた学生・研究者を育てられ、日本の英文学界に多大な貢献をされました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(文学研究科・文学部)

内海洋一名誉教授(経済学部)逝去



本学名誉教授内海洋一先生は、5月5日(火)にご逝去されました。享年90歳でした。

先生は、大正8年4月24日、兵庫県に生まれ、昭和19年9月京都帝国大学経済学部を卒業後、一時株式会社住友本社(調査課)に籍を置かれましたが、昭和25年3月大阪大学助手に任ぜられました。同28年3月講師、同29年12月助教授を経て、昭和41年4月教授に昇任、社会政策講座を担当し、積極的な教育・研究活動を続けられ、昭和58年4月停年退官、名誉教授の称号を授与されました。

教育・研究面では経済学部で社会政策、社会思想概論、労働経済学等の講義を担当して多くの学生を教育し、実業

界・官界に有為の人材を送り出すと共に優れた研究者を育成して学界に貢献されました。大阪大学退官後は、大阪学院大学経済学部教授として就任し教育・研究に携わり平成7年3月定年退職されました。

先生は戦後、英米を中心に発展した「労働経済学」をいち早く取り入れ、日本の労働経済問題の分析に関する先駆的業績をあげられました。他方、先生は社会階級の研究も行なわれ、この分野に多大の貢献をされました。これらの成果は『社会問題の基礎理論 - 賃銀と階級に関する研究 - 』(昭和33年)として発表されています。また先生は経済社会学の諸問題の研究も行なわれ、それらの成果をまとめたものを『経済社会学の主要問題』(昭和53年)として発表されたほか、社会思想の分野では、19世紀後半からのドイツ社会民主主義思想の研究を専門とし、優れた分析や解明を行われました。

先生は、わが国経済社会学会の最高権威の一人として昭和41年に経済社会学会の創設に参加し、理事を務め、また会長も歴任されました。そのほか、社会政策学会幹事、日本労使関係研究協会理事を務め、学界の発展に大きな役割を果たされました。

なお先生は歌人でもあられ、その作品は『昭和万葉集』に収録されています。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(経済学研究科・経済学部)

奥野善彦名誉教授(歯学部)逝去



本学名誉教授奥野善彦先生は5月5日(火)、肺炎のため逝去されました。享年79歳でした。

先生は、昭和30年3月大阪大学歯学部を卒業され、同年9月大阪大学歯学部助手に採用され、昭和44年11月には助教授に、昭和54年9月には第3代の歯科補綴学第二講座の教授に就任され、有床義歯ならびに歯科補綴に関連した多数の優れた業績を残されました。

また昭和56年3月から昭和60年3月までは歯学部附属歯科技工士学校長、昭和58年1月から昭和60年3月までは大阪大学評議員、さらに平成2年4月から平成4年3月まで歯学部附属病院長を歴任され、平成5年3月に定年退官されて、同年4月に大阪大学名誉教授になられました。

この間先生は、高い理念と豊かな知識、情熱をもって学生の教育ならびに研究者や、歯科医師の指導育成にあたられました。また、大阪大学退官後も、特に歯科医療をとくに支える専門職である歯科技工士ならびに歯科衛生士の育成に力を注がれました。

学外においては、歯学視学委員、大学設置・学校法人審議会専門委員、大学基準協会歯科専門分科会専門委員、医療関係者審議会専門委員などの教育行政にかかわる役割のほか、大阪府歯科技工士試験委員、歯科医師国家試験委員も務められました。

学会においても日本補綴歯科学会副会長、日本顎顔面補綴学会理事、日本歯科医療管理学会理事、日本口蓋裂学会評議員など各種学会の理事や評議員を多数歴任し、わが国の歯科医学の発展に尽力し、指導的な役割を果たされました。

先生の薫陶を受けた門下生は数多く、現在では全国各地の大学において歯科医学の教育、研究者として、あるいは地域の歯科医療を担う第一線の臨床家として、それぞれ従事しています。

このように奥野善彦先生は、研究、教育、臨床を通して、専門の歯科補綴学分野にとどまらず、広く歯科医学、歯科医療の発展に貢献されました。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(歯学研究科・歯学部)

大阪大学公式ホームページリニューアル

大阪大学公式ホームページは6月1日にリニューアル致しました。
今回の更改にあたっては、特に下記について注力致しました。

- ・情報のターゲットの明確化
- ・情報更新速度の向上
- ・英語コンテンツの充実

今回の更改は、昨年度本部に設置されたウェブデザインユニットが中心となって実施致しました。旧ホームページは大量のコンテンツで構成されており、その完全な移行には今しばらく時間が必要と考えております。当面は移行コンテンツのブラッシュアップを中心に、徐々にコンテンツを増やしていく予定です。

皆様のご理解・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

(ウェブデザインユニット)



人権問題に関する講演会

人権問題に関する啓発行事の一貫として、次のとおり講演会を開催いたします。

今回は、ニューカマー外国人の教育に関わる諸問題をテーマとして取り上げます。

教職員・学生の方の積極的な参加をお待ちしております。また、近隣地域の方々にも多数ご参加いただきますようご案内いたします。

- 日 時 7月10日(金) 15:30 ~ 17:00
- 会 場 工学部 サントリー記念館メモリアルホール C3棟5階
- 講 師 人間科学研究科 志水宏吉教授
- 演 題 「教育における人権 - ニュカマー外国人問題から - 」
- 問い合わせ先 大阪大学総務部総務課総務係 (TEL: 06 - 6879 - 7014)

(人権問題委員会)

天神祭船渡御『阪大船』

船渡御は、日本三大祭の一つである大阪天神祭のクライマックスを彩り、意匠を競った百隻余りの船が大川を行き交うものです。

大阪大学では、「水～っ都 大阪大学」をキャッチフレーズに第5回となる『阪大船』の勇姿を大川の川面に浮べるようになりました。

ご乗船いただく阪大ファミリーの皆様方には、大阪の夏の風物詩を心ゆくまでお楽しみ下さい。

冷えたビール、美味しい弁当、綺麗な花火が皆様をお待ちしています。

日 時: 7月25日(土) 18時 ~ 21時頃 (集合時間 17:30)

乗 船 料: お一人 30,000 円

飲食込、振込手数料別、簡易トイレ有り

家族割引有り (お一人 20,000 円)

定 員: 170 名

問合先

大阪大学天神祭実行委員会

(大阪大学企画部広報・社会学連携事務室)

〒565 - 0871 吹田市山田丘1 - 1

TEL 06 - 6879 - 7151

FAX 06 - 6879 - 7156

メール NOSE-N @ star.jim.osaka-u.ac.jp



(毎日新聞社提供)

(企画部広報・社会学連携事務室)

第2回適塾講座

適塾記念会では、適塾顕彰事業の一環として、緒方洪庵と適塾生の足跡をたどり、適塾が果たした歴史的役割を考えるため、昨年度より適塾講座を開講しました。これは、単なる講演会ではなく、講師と受講生がともに適塾を考える講座です。そのため、質疑応答の時間をできるだけ多くとっています。多くの方々のご参加をお願いいたします。

1. テーマ 「江戸時代の大坂と適塾」

適塾は、幕末期大坂に開かれた蘭学塾である。幕府直轄都市大坂は、政治的・軍事的・経済的にきわめて重要な地であるとともに、最高水準の文化都市でもあった。適塾をとらえるには、何よりも、江戸時代とりわけ幕末期大坂社会の特質と関わらせて考える必要がある。今回は、大坂町人社会の特質、大坂の医療環境、幕府の大坂支配という側面から、適塾を取り上げる。

2. 講演日時等

- 第1回 9月1日(火) 18:00～19:30
「江戸時代大坂の医療環境と適塾」 海原 亮氏(住友史料館研究員)
- 第2回 10月6日(火) 18:00～19:30
「江戸時代の大坂町人社会と適塾」 今井 修平氏(神戸女子大学文学部教授)
- 第3回 11月10日(火) 18:00～19:30
「大坂町奉行所支配と適塾」 村田 路人氏(大阪大学大学院文学研究科教授)

3. 会場 大阪大学中之島センター 大阪市北区中之島4丁目3番53号 06 - 6444 - 2100

- 《電車》 ・京阪中之島線 中之島駅より徒歩5分
・阪神本線 福島駅より徒歩約9分
・JR東西線 新福島駅より徒歩約9分
・地下鉄四ツ橋線 肥後橋駅より徒歩約10分
・JR大阪環状線 福島駅より徒歩約12分
・地下鉄御堂筋線 淀屋橋駅より徒歩約16分
- 《市バス》 ・大阪駅前バスターミナル
53系統 玉江橋下車徒歩約1分
75系列 田養橋下車徒歩約1分

4. 定員 50名(申込先着順)

5. 申込方法 郵便葉書に住所、氏名、電話番号をご記入の上、7月3日(金)までにお申し込み下さい。 受講者には追って受講カードをお送りいたしますので、受講料を指定の銀行口座にお振り込み下さい。

6. 受講料 3,000円(3回分)

7. 対象 適塾記念会の会員の方(新規加入者を含む。)

申込・お問い合わせ 適塾記念会事務局

〒565-0871 吹田市山田丘1-1 大阪大学コンベンションセンター

電話:06 - 6877 - 9852

(適塾記念会)

大阪大学基礎工学部 第31回公開講座 「未来を拓く先端科学技術」

■ 公開講座の目的

私たちの生活は科学技術によって支えられており、その進歩と密接な関係をもっています。特に日常生活に直接関係する機器や物質の目覚ましい発展と普及、情報技術の急速な進歩とそれにより得られる膨大な情報、生命の謎の解明と先端医療技術、これらに囲まれた私たちの日常生活を安全で豊かなものにするには、それにふさわしい教育と知識を備えることが必要です。このような環境の中、若い人たちから家庭の主婦ならびに学校教育を離れて久しい中高年の方々にいたる広い範囲で、科学的教養を積む機会を望む声が高まっています。大阪大学基礎工学部ではこのような声に応えるべく、あわせて従来とかく軽視されがちであった大学と地域社会との連帯を強めるとともに本学部の情報発信の一環として、1979年以來30回にわたり公開講座を開催してきました。

本年度（第31回）も、様々な立場から私たちの暮らしや社会と密接な関係を持ち、明るい未来を拓く最先端の科学技術の成果とその意義を紹介する企画を行います。

- 期 間：8月3日(月)～6日(木)
- 会 場：大阪大学基礎工学部 国際棟（シグマホール）
- 受講料：無料

8月3日(月)

- 10:00～ 開講式
- 10:20～11:50 モデリングとシミュレーションによる材料科学 - 材料の機能と性質の予測 -
機能デザイン領域 制御生産情報講座 教授 尾方 成信
- 13:15～14:45 スケジューリング技術 - 資源の有効利用と環境負荷の少ない社会をめざして -
社会システム数理領域 システム数理講座 准教授 西 竜志
- 15:00～16:00 見学会

8月4日(火)

- 10:20～11:50 頭の中のサイン、コサイン - 「波」による聴覚と視覚情報の脳内表現 -
生命機能研究科 脳神経工学講座 教授 大澤 五住
- 13:00～14:30 あなたの個人情報を狙い撃ちさせない! - 推論攻撃とそれに対するセキュリティ -
情報科学研究科 セキュリティ工学講座 准教授 石原 靖哲
- 14:50～16:20 確率過程の統計 - 時系列データから有益な情報を抽出する -
数理科学領域 数理計量ファイナンス講座 准教授 内田 雅之

8月5日(水)

- 10:20～11:50 分子機械 - ナノメートルの世界における細工と動作 -
未来物質領域 新物質創成講座 准教授 廣瀬 敬治
- 13:00～14:30 金属超微粒子が拓く触媒の世界 - ナノより小さなサブナノ粒子触媒まで -
化学工学領域 反応化学工学講座 准教授 水垣 共雄
- 14:45～15:45 見学会

8月6日(木)

- 10:20～11:50 アインシュタインの物理と産業利用研究? - 光電子分光の新たな局面 -
物性理工学領域 電子相関物理講座 教授 関山 明
- 13:00～14:30 発光材料としての量子ドット - “光らない”から“光る”材料へ -
電子光科学領域 固体電子工学講座 准教授 中村 芳明
- 14:45～15:45 見学会

■ 受付開始: 7月1日(水)から

■ 問い合わせ先: 大阪大学基礎工学部研究科庶務係

〒560-8531 豊中市待兼山町1-3 TEL: 06-6850-6131 FAX: 06-6850-6151
E-mail: KISOKOU-S@star.jim.osaka-u.ac.jp URL: <http://www.es.osaka-u.ac.jp>

(基礎工学研究科・基礎工学部)

平成21年度大阪大学大学院言語文化研究科公開講座
「教員のための英語リフレッシュ講座」

日時：8月10日(月) 8月11日(火) 8月12日(水) 8月13日(木)
会場：大阪大学中之島センター（所在地 大阪市北区中之島4-3-53）
主催：大阪大学大学院言語文化研究科
後援：大阪府教育委員会・兵庫県教育委員会

近年、オーラルコミュニケーション能力の育成を目指すカリキュラムの推進に伴い、中学・高校の現場においては、具体的な指導内容・方法・技術などの面でさまざまな工夫が模索されている。小学校における英語導入やセンター試験におけるリスニングにどう対処するかという問題もある。

本講座では、とかく生徒には役に立たないと敬遠されがちな文法、訳読などの意義を、最近の理論的な知見、作品の意味・語用・文体論的分析、そして実際の運用における有用性の認識を踏まえて見直し、教員それぞれが得意とする技量を適切に活かし生徒も納得できる魅力的で効果的な教え方を提案する。さらに、関連研究領域（認知心理学や脳イメージングなど）の最近の理論的な知見を踏まえ、コミュニケーション能力の育成につながる授業展開のあり方を（ネットやCALLの活用を含めて）総合的に考察する。そして、発音の動的な変化の仕組みを分かりやすく解説・訓練するとともに、ネイティブスピーカーによる体験授業を通じて英語運用力の実質的向上も目指す。全体討論では、講師陣が受講の先生方の抱えるいろいろな問題、疑問に専門的知見を踏まえて答えるほか、旬なトピックについて論じる。

講師および演題

8月10日(月)

- 10:00 ~ 12:30 「転換を迎える英語教育 - 言語習得研究を踏まえて」 成田 一教授
13:20 ~ 14:50 「英語らしい発音の科学 - ダイナミックメカニズムと訓練」 成田 一教授
* 15:00 ~ 16:30 「英作文をどう指導するか - バラグラフ・ライティングと添削指導」 小口一郎准教授
* 15:00 ~ 16:30 「小学校で何が教えられるか - 先進校の実践からみた英語ノートへの示唆」 (立命館小学校) 田縁眞弓教諭

8月11日(火)

- 10:00 ~ 12:30 「ネット時代における国際英語の統合的実践」 日野信行教授
* 13:20 ~ 16:30 「コミュニケーション基礎」 デビッド・マレイ講師
* 13:20 ~ 16:30 「コミュニケーション中級」 デボラ・ヒル特任准教授
* 13:20 ~ 16:30 「コミュニケーション上級」 ジェリー・ヨコタ教授、アンドリュー・村上スミス准教授

8月12日(水)

- 9:30 ~ 11:30 「英文法研究の英文法指導への応用」 岡田伸夫教授
12:20 ~ 13:50 「認知的な視点から見た英文法」 早瀬尚子准教授
14:00 ~ 15:30 「英語の感覚を語法で養う - 教材・試験問題における語法の誤り」 (関西学院大学大学院) 八木克正教授
15:40 ~ 17:10 「英語辞書とコーパスの活用 - 効果的な教材研究のために」 (京都外国語大学) 赤野一郎教授

8月13日(木)

- 10:00 ~ 12:00 「英文を読む楽しみ」 沖田知子教授
12:50 ~ 14:20 「英詩の世界を味わう」 小口一郎准教授
14:30 ~ 16:30 「全体討論(質疑&トピック討論:英語の授業は英語で行うべきか?)」 全講師陣
16:40 ~ 17:00 講座修了証授与式 (言語文化研究科長) 金崎春幸教授
17:10 ~ 18:50 テーマ討論懇親会

- *のついた8月10日(月)の「英作文をどう指導するか」「小学校で何が教えられるか」と、11日(火)の「コミュニケーション基礎・中級・上級」は選択講義です。申し込み時に選んでください。
- 会場では10日(月)に『英語リフレッシュ講座』(大阪大学出版会)を著者割引1,900円で頒布いたします。

定員 70名程度(先着順:定員に達した時点で大阪大学大学院言語文化研究科HPに掲載します。)

教材作成・連絡郵送費 7,000円

参加申込み(受付期間 7月1日(水)~7月17日(金)期限厳守)

- お振り込みいただきました教材作成・連絡郵送費は、欠席された場合でも、返金できませんので、ご了承ください。
- 本公開講座修了証書は全講義の60%以上に出席された受講生の方に授与いたします。それ未満の方には受講証明書を後日送付いたします。
- お申し込みの際に必要な受講のみなさまの情報は、連絡先の把握及び今後の公開講座運営上の統計資料作成、関連情報の提供以外には使用いたしません。

問い合わせ 大阪大学言語文化研究科総務係(TEL:06-6850-5855 E-mail:genbunsoumu@ns.jim.osaka-u.ac.jp)
言語文化研究科ホームページ: <http://www.lang.osaka-u.ac.jp/> (言語文化研究科)



研究支援員制度利用者へのインタビュー

大阪大学は、平成19年度文部科学省科学技術振興調整費女性研究者支援モデル育成事業による「次世代に繋ぐ女性研究者サポート連鎖の形成」の採択を受け、平成19年11月より「研究支援員制度」を開始しました。「研究支援員制度」とは、出産・育児・介護等で研究時間が確保できにくくなっている女性研究者の研究面での支援を行うため、同じ研究分野の院修了者・卒業生・学生を「支援研究者」や「研究補助員」として採用・配置するものです。これは同時に、支援する院修了者・卒業生・学生に対しても、ロールモデルと接することによりキャリア形成を促すことをねらいとしています。

今回は、本制度利用者として、産業科学研究所分子材料解析研究分野の武井史恵助教と、岡芳美支援研究者を紹介します。また、お二人の研究室の中谷和彦教授にも一言いただきました。

インタビュー

「武井先生は、分子生物学の分野で『蛍光分子を使った一塩基多型の検出』に関する研究を行っておられますね。」

武井史恵助教

「小さい子供を抱える身で独身の頃のように実験を進めることはなかなか難しく、子供の急な病気で実験を中断せざるを得ないこともありました。この制度が始まり、支援研究者として来てくださった岡さんは、知識、技術とも非常に高く、依頼したこともすぐに理解してくれ実験がスムーズに進むようになりました。おかげさまで研究成果も上がり、大変に助かっています。時間が無くて実験ができないというストレスが減ったことも私にとって大きなメリットです。また、私だけでなく、研究室にも研究上良い刺激となっています。」

岡芳美支援研究者

「支援研究者になり、新しい技術を覚えることが出来ました。」

また、子どもを持って研究をするということの大変さを間近に見ることもできました。将来は、アカデミック・ポストに就きたいと思っています。」

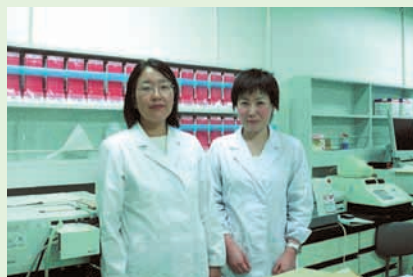
中谷和彦教授

「ラボの目的にあるキャリアアップの連鎖を実現するべく、お二人には協力して難しい研究を進めて頂いています。御陰さまで、それぞれ科研費の申請が採択される等、お二人のキャリアに直接のプラス効果があるだけでなく、力強く研究されている女性研究者の姿に研究室の学生も良い刺激を受けていると感じています。」

インタビュー

「武井先生、岡さん、中谷先生、ありがとうございました。今後のお二人のご活躍を期待しております。」

(女性研究者キャリア・デザインラボ)



たけのこ保育園にカラフルな風車が登場

吹田キャンパスのたけのこ保育園に色とりどりの手づくり風車が登場し、園児や保育士さんたちを楽しませています。ペットボトルを工作してスプレーでペインティングしたもので形や大きさは様々。また、廃棄物を再利用しているのもユニーク。制作者は高槻市に住む尾上修巳さん。来院した歯学部附属病院の隣に保育園があることに気づき、「大学にも保育園があるとは知らなかった。それなら風車をつくって子どもたちに喜んでもらおう」と。園庭の柵に取り付けられた大小20余りの風車が初夏の風を切って軽やかに回っています。



(たけのこ保育園、企画部企画推進課)

総合図書館に飲料の自動販売機設置

附属図書館総合図書館では、このほど飲物の自動販売機を設置しました。これは、図書館利用者の声を反映したものであり、図書館のアメニティ向上を目指しています。

自動販売機は総合図書館正面玄関入口のエントランスにカップ式のもの1台、東玄関入口のエントランスにペットボトル式のもの1台設置されました。

双方とも環境に配慮し、カップ式自販機の隣にはデポジット式紙カップ専用回収機が、ペットボトル自販機の隣には専用のデポジット機が設置されており、容器回収時には10円が返却されるようになっています。

なお、カップ式飲料の利用はエントランスのみとなっており、閲覧室への持ち込みは禁止しています。

(附属図書館)



ガイドマップ

薬学研究科薬用植物園でリュウゼツラン開花



(5月初旬時点)
茎は6メートル程度に伸び、
蕾が開きつつある状態。



テキーラの材料として有名なリュウゼツラン（竜舌蘭）の一種が、薬学研究科薬用植物園で開花しました。

この花は、数十年に一度しか咲かない花で、また、一度咲くとそのままその生涯を終えてしまう非常に珍しい花です。

薬学研究科が豊中から吹田キャンパスに移転した昭和50年3月から、34年に亘りその歴史を見つめてきたリュウゼツランが、ついに花を咲かせる貴重な瞬間をぜひ一度、薬学研究科でご覧ください。



(6月1日時点)
人と比べるとその大きさが
わかります。



(6月15日時点)



(薬学研究科・薬学部)

グローニンゲン教育研究センターから

グローニンゲン教育研究センター長

弘 津 禎 彦

今年4月より大阪大学海外3拠点（アメリカ・オランダ・タイ）の一つ、グローニンゲン教育研究センター（オランダ）に関係することとなりました弘津と申します。昨年度までの藤原センター長の勤務形態とは異なり、私の場合は当地への派遣ではなく、阪大から年6回（各3週間）くらいセンターに出張することになります。センターには常勤の副センター長が今までどおり勤務いたします。

本センターでは阪大の欧州関係の教育、研究プログラムの支援活動、情報収集、阪大のオランダや欧州での研究集会の支援、阪大からのグローニンゲン大留学生の支援、などを行ってきておりますが、上記の活動の援助依頼や連携のために、たとえばオランダ大使館、EC事務局、大阪府や大阪市の在欧州事務所、在蘭日本商工会議所などを訪問したりも致します。私も、4月にハーグの在オランダ日本大使館を訪問し、渋谷特命全権大使に着任のご挨拶をいたしました（大使には過去2回、グローニンゲン地区での大阪大学のワークショップに出席をお願いし、講演いただいています）。本センターでの仕事の内容については、すでに昨年の10月号に鐘ヶ江副センター長の記事が掲載されていますので、ここでは省略することにし、私が着任した後のグローニンゲン大学のキャンパス取材内容やトピックスなどを紹介させていただくことにいたします。



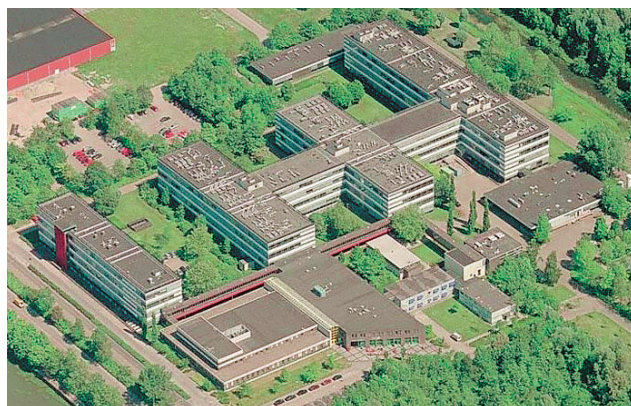
筆者（左）と鐘ヶ江副センター長（右）

■ グローニンゲン大学の教育、研究組織

我国の大学では、研究分野間の融合領域の広がりを推進するために、近年、大学ごとに特徴ある分野横断的な組織を作ることが進められて来ている。この側面で、欧州の大学がどのような教育、研究組織で臨んでいるかは大変興味のあるところである。ここでは、グローニンゲン大学の場合を例に挙げて、紹介することにする。

グローニンゲン大学のキャンパスは、大学本部、法、文、行動・社会科学、哲学、宗教学などの学部、大学院、研究所・センターのある市中心部のキャンパスと、医学・生命科学関係学部、大学院、研究所・センター、大学病院などからなる医科学系キャンパス、および、数学・自然科学、経済・経営、空間情報などの学部、大学院、研究所・センターなどからなるゼルニケ・キャンパスの3つに別れてい

る。大学の規模は学生数でみれば阪大とほぼ同じである。大学はResearch Universityを標榜しており、文系、医系、理系合わせて27の研究所・研究センターを有し、教員は全員いずれかの研究所、センターに属しているのが特徴である。これは、分野融合・横断型の研究を通して新しい学問分野を切り開いて行くという考えのオランダの大学の一般的な特徴である。大阪大学グローニンゲン教育研究センターはゼルニケ・キャンパスにあることから、このたびはこのキャンパスを中心に取材を行った。まず気になったのがこのキャンパス名であるが、光学レンズ理論などで有名な、あのゼルニケの名前をとっていることがわかった。ゼルニケ（Frits Zernike）は1953年に位相差顕微鏡の発明でノーベル物理学賞を得ている。位相差顕微鏡は生体観察などに適した顕微鏡であり、最近はこの手法を応用した電子顕微鏡も登場している。ゼルニケはアムステルダム大学卒であるが、位相差顕微鏡の研究はグローニンゲン大学で行われたものである。彼はグローニンゲン生まれのベルヌーイ（流体力学で有名）と並んで当地の栄誉を担って来ている。



ゼルニケ・キャンパス

ゼルニケ・キャンパスは、情報、核物理、材料物性、生命科学、理学（数学・物理・化学）、天文学、空間情報、経済・経営などの研究所、センターを擁している。これらの研究機関では研究を行うだけでなく、スタッフは全て理系、文系の各専門分野に関係した教員組織（Faculty）にも属し、学部や大学院教育も併せて行うことが義務付けられており、教育は研究所やセンター、共通教育棟などで行われる。ここ以外のキャンパスでも同様な教育研究形態が存在する。このキャンパスでは、わが国の大学の研究機関の雰囲気とは大きく異なり、学生達（学部も大学院も女子学生が約4割と多い）が行き交い、活気に満ちている。4月末から5月にかけて、材料物性関係の研究所であるZernike Institute for Advanced Materialsを訪問し、研究所のDirectorや、この研究所のスタッフが主に所属している数学自然科学系FacultyであるMathematics and Natural SciencesのDean、Vice-Deanとお話する機会があり、この研究所の生い立ちや組織、方向などについて知ることが出

来た。この研究所は、もとは材料科学センター（物性物理、化学の2分野）として1970年にスタートしたが、2007年に生命科学を含めた改組を行い、物理、化学、生体の3分野、19の研究グループからなる「トップレベル分野融合型研究所」としてのゼルニケ先端材料研究所をスタートさせている。研究所は約120名の教員・研究者、約160名のPhD学生を擁し、人件費を含む年間経費は約2千万ユーロである。最近、我国のグローバルCOE計画に相当する学術振興の国家計画がオランダでも進行しており、このゼルニケ先端材料研究所はオランダ国内の大学の中から選ばれた6つのCOEの1つになっており、国の材料科学研究のセンターとして位置づけられ、現在3期目（2013年まで）に入っているとのことである。このたび、この研究所の教研究室を訪問し、物理と化学分野のナノサイエンスに関する先進的融合研究のいくつかを紹介いただいた。博士学生は必ず2つの異分野研究室に同時所属することを義務付けられており、融合研究の根源的部分での積極的な対応が見られる。ところで、オランダは小国（現在の人口は約1,600万人）であるが、古くから科学技術に関しては高いレベルにあり、この国の科学の歴史では、ファン・ホッフ、ローレンツ、ファン・デル・ワールス、ゼーマン、オンネス、デバイと言った著名な人物が続々と登場している。現在も、基礎科学や情報通信、生命科学、ナノテクノロジー、触媒などの分野で高い競争力を有しているようである。今後、融合型研究を重要視した科学技術の展開がどのような成果を生み出すか注目したい。

なお、欧州では一般的であるが、総合大学には工学系として独立した教育機関はなく、そこでの工学分野の教育は、理数系の応用として行われている。工科系大学は別に存在し、オランダではデルフト工科大などが有名である。EU諸国は教育・研究のグローバル化に非常に熱心であり、グローニンゲン大学では大学院講義はどの分野もすべて英語で行われ、学部も英語での教育を目標にしており、講義はオランダ語で行うクラスでもテキストは英語とのことである。このため、どの学部、大学院も留学生数が増加しており、最近では、中国からの留学生数の伸びが著しいようである。欧州の教育制度や形態はなかなか複雑で分かり難いが、情報を集めて、またの機会に紹介させていただくことにする。



このキャンパスでの理数系教育が行われている Mathematics and Natural Sciences の教育棟（ベルヌーイ・ビル）である（建物が青く囲まれた部分は「改修工事」によるものではなく、建物のデザインなのである。）

■ グローニンゲン大学創立395年祭

グローニンゲン大学は1614年創立のオランダで2番目

に古い歴史を誇る大学であり、5年に1度 Lustrum（ルストルム）と呼ばれる創立記念祭を実施している。今年も79回目の Lustrum として、創立395年祭の各種イベントが3月26日のオープニングイベントを皮切りに各会場で順次実施されており、6月5日の名誉博士号授与式には大阪大学総長も招待を受けた。大阪大学総長は残念ながらご都合により当該イベントに出席できず、代理として私が出席することとなった。このたびは、現国際司法裁判所長官の小和田恒（ひさし）氏に名誉博士号が授与された。



教会に向かうセレモニーの隊列（左から2番目が著者）

名誉博士号授与の式典は6月5日の昼から、大学本部からほど近い、約5百年の歴史を持つマルチニ教会で行われた。黒の帽子をかぶり、黒いガウンをまとった大学学長・副学長、今回の4名の名誉博士、他大学からのゲストなどが列を組んで、騎馬警官先導のもとに、静々と大学本部から繁華街を抜けて教会に向かって歩いた。筆者も、ダブダブで似合わないガウンをまとっての参加となった。教会では、正面に大学のオーケストラ、横にコーラス隊がひかえており、ガウンの出席者、一般の参加者が着席した後、ブラームスの曲が静かに演奏されて、式典が Zwarts 理事のスピーチにより始まった。文学、生命科学、心理学分野の3名の名誉博士号授与者の紹介と講演が序順次行われ、最後は小和田長官への授与で締めくくられた。小和田長官は、国際協調での活躍ならびに戦後日本文化関係の書籍が評価されての法学、文学分野でのダブル名誉博士号授与となった。日本文化研究で有名な Segers 教授の紹介のあと、小和田長官のスピーチが行われたが、欧州・日本の一層の関係強化を求める格調高い内容であった。なお、本授与式には小和田長官は奥様を同伴され、パーティ・ではご夫妻は気軽に、我々も含めて多くの方々と談笑された。



名誉博士号を授与される小和田長官

昌原大学校(韓国)

Changwon National University



昌原大学校は、1969年に馬山教育大学として設置され、1985年に国立昌原大学校として現在の姿になりました。キャンパスは、慶尚南道の道庁所在地である昌原市に位置します。昌原市は計画都市として整備され、中心部の市街地はつくば市に似て整然とした景観です。韓国最大級の工業団地があり、昌原大学校は産学連携にも力を注いでいます。

教職員は約1,200名、学生数は約15,100名が在籍しています。学部は人文科学、社会科学、経済・ビジネス、自然科学、工学、美術の6学部（学部生は約13,000名）大学院は人文・社会科学、自然科学、工学、美術・体育の4研究科（大学院生は約2,100名）から構成されています。校訓は「誠實、眞理、自由、創造」、シンボルである鳳凰は40周年記念のロゴにも使用されています。

特に1990年代に急成長し、年間総合評価（1997年）および教育改革（1999年）で国内最高位、産学共同推進で大統領表彰（1998年）を受けています。現在は、研究・高等教育に関する国家プロジェクトであるNew University for Regional Innovation（NURI）およびBrain Korea 21（BK21）に重点大学として採択されています。

昌原大学校は日本、米国、中国をはじめ17カ国81大学と大学間または部局間協定を締結し、特に工学分野を中心として国際交流が活発です。大阪大学とは、2002年に基礎工学研究科、2005年に工学研究科と部局間協定を締結し、交換留学生の受入、相互訪問により継続的に交流を深め、2009年に改めて大学間協定を締結して新たな交流がスタートしました。

ホームページ：<http://www.changwon.ac.kr/english/>



編集後記

近年、子どもをとりまく環境やところについては、いろいろなことで問題となりメディア等で目にするケースも増えてきました。複雑で多様なそれらの問題に対応する専門家育成を目指して、今年4月に新しく設置された博士後期課程のみの大学院「大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科」について、今回のクローズアップで紹介しています。名前からもわかるように、大阪大学と金沢大学・浜松医科大学が密接に連携・協力するかたちの、いままでの大阪大学にはない形の大学院となっています。

また、いままで、図書館は個人で静かに利用するものでしたが、この度、附属図書館総合図書館と理工学図書館に「ラーニング・コモンズ」という「話せる図書館」スペースが誕生しました。6月から運用開始となり、本号のナウスPECIALでご紹介している多目的ディスプレイ「O+PUS」など、いままでになかった大阪大学が今年も続々と登場しています。

（瀬尾）

交響楽団

阪大生が織り成す努力型シンフォニー



私たち大阪大学交響楽団は、年2回の定期演奏会を成功させることを目標に日々活動しています。この定期演奏会はプロの指揮者の方をお招きして、大阪のザ・シンフォニーホールや京都コンサートホールといった大きなホールで開いており、来場者数が1000人を超えることもあります。また今年の1月末には大阪大学のご出身である手塚治虫先生の生誕80周年を記念したNHKの特別番組「プレミアム10 手塚治虫 漫画、音楽、そして人生」にも出演しました！



ふだんの練習は平日に個人練習・パート練習を行い、休日に合奏をするという形になっていて、合宿は年に3回あります。

音楽が大好きで、楽器が大好きで、みんなで演奏するのが好きな人がたくさん集まっているので、練習にも自然と熱が入ります。もちろん意見がぶつかり合って、なかなかまとまらないこともありますし、技術的に未熟な部分もありますが、今の私たちにしかできない音楽の世界を作っていくためにコツコツと努力を続ける毎日です。

次回の演奏会は7月4日(土)午後6時から吹田市文化会館メシシアター大ホールにて行います。曲目はC.M ウェーバーの歌劇「オベロン」序曲、P. チャイコフスキーのバレエ組曲「眠れる森の美女」作品66a、J. ブ람スの交響曲第1番です。クラシック好きの方はもちろん、これまであまり興味がなかったという方も、ぜひ一度足を運んでみてください。

団長 瀧山絵里(経3年)

コメント

私たちの演奏を通じて、ひとりでも多くの方にオーケストラの魅力を知っていただければと思います♪



練習場所：豊中キャンパス学生会館

練習日時：月曜～土曜 各自個人練習

休日 セクション練習や全体練習(学外)

部員数：192人

連絡先：森田(広報)

メールアドレス handaiphil@s198.xrea.com

ホームページ <http://handaiphil.s198.xrea.com/>

トピックス

大阪大学多目的ディスプレイ披露式開催

大阪大学は、学内のコミュニケーションの活性化とイメージ・リテラシー教育の充実を図るため、学内14カ所に大型ディスプレイを設置し、6月より運用を開始したことを記念し、去る6月10日(水)に披露式を開催いたしました。

披露式では、学内外から多数の出席者があり、武田佐知子理事・副学長の司会により、このディスプレイシステムの愛称である「O+PUS (Osaka university + Panasonic Universal Sight) (オーパス)」が披露され、続いて、鷲田清一大阪大学総長と今回のディスプレイ設置趣旨にご賛同いただきディスプレイシステムをご寄附いただいたパナソニック株式会社の福島伸一代表取締役副社長による除幕式が行われた後、鷲田総長の挨拶、福島副社長の祝辞がありました。

「O+PUS」は、学内コミュニケーションツールとして、大学構成員への情報伝達のほか、高精細なコンテンツや学生参加型コンテンツにより「知的なだけでなく鋭敏な感受性を持った学生」の育成が期待されています。



福島副社長(右)と鷲田総長(左)による除幕式

披露式では、大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの開講している授業で学生が制作した作品も上映され、学内外の来賓・関係者が、終始和やかな雰囲気の中運用開始を祝いました。

(企画部広報・
社学連携事務室)

*設置場所等につきましては本号の「ナウススペシャル」(18～19ページ)をごらんください。

阪大 NOW No.111 2009 6月号

2009年6月20日発行

編集・発行 大阪大学企画部広報・社学連携事務室 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-1
TEL: 06 (6879) 7017 FAX: 06 (6879) 7156
ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp/>

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。
E-mail: kikousyagakukouhou@ns.jim.osaka-u.ac.jp